

全国同人雑誌最優秀賞 第16回 まほろば賞 発表

昨年からまほろば賞は全国同人雑誌協会と文芸思潮が主催することになりました。今後もこの形で進めさせていただきますので、どうぞよろしくお願ひします。

第一六回全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」選考会は、二〇二二年七月一七日に東京都大田区民プラザ会議室において、三田誠広氏、中上紀氏、小浜清志氏、五十嵐勉「文芸思潮」編集長の四名の選考委員によって慎重に審議が行なわれました。作品ごとに各選考委員が鋭利に批評し、熱い議論が交わされました。厳正な審査の結果、左記のように決定いたしましたので、ここに選評とともに発表させていただきます。

また全国からの読者の投票と寄付による読者賞の投票および内容の結果も併せてここに掲載させていただきます。昨年、「まほろば賞」は受賞作品には、賞状と賞金三十万円（賞金は主に寄付によるものです。また二人同時受賞の場合は、恐れ入りますが、一人二十万円とさせていただきます）および記念トロフィーを贈らせていただくこ

とになりました。河林満賞にもそれぞれ賞状と賞金十万円と記念品を、また読者賞には投票賞金と優秀賞賞金五万円および記念品を贈らせていただきます。優秀賞にも記念品と賞金五万円を贈らせていただきます。

今後も全国の同人雑誌の中から優れた作品が生まれることを祈念し、たくさんの同人雑誌の作品が全国同人協会・全国同人雑誌振興会及び文芸思潮に寄せられることを期待しております。

また、どうぞ作品の推薦にもいつそう多数の方が御参加くださるようお願いいたします。また積極的に読者賞への投票に加わっていただき、ぜひ皆様自らの手でこの賞を盛り上げ、育てていただきたいと思います。全国の同人雑誌諸氏の御参加と御支持を切に願ひする次第です。

またこの結果及び選評とその感想・批評の動画、また優秀作品はインターネット「文芸思潮」ホームページでも発表される予定です。どうぞ御覧ください。

第16回全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

「光復香港」

〔季刊作家〕99号

鈴木友範

河林満賞

「鴉」

〔南風〕48号

紺野夏子

読者賞

「『よもつ耶』

更待月のこと」

〔札幌文学〕91号

海邦智子

「夢で逢いましょう」

〔朝〕42号

天野いずみ

まほろば賞賞金は、木内是壽氏、故蘭藍子氏、三田村博史氏、来の宮あんず氏、故原石寛氏、夏目日美子氏、前岡光明氏、今田真理子氏、二宮英郷氏、堀井清氏、西島雅博氏、高橋惟文氏、勝又浩氏、越山しづか氏、「北斗」などの御寄付によるものです。ここに厚く御礼申し上げます。また「狐火」「安藝文学」「べん」「海」「文芸中部」など文芸思潮同人誌団体会員の御協力にも厚く御礼申し上げます。



みた まさひろ
1948 大阪生まれ
早稲田大学文学部卒
77「僕って何」で芥川賞受賞
作品はほかに「いちご同盟」
「空海」「親鸞」など
最近の本「遠き春の日々」
「少年空海アインシュタイン時
空を超える」「天海」
日本文藝家協会副理事長
武蔵野大学名誉教授

二作同時受賞

三田誠広

今回は作品のレベルが例年より高かった。とくに二作品の評価が均衡していて二作同時受賞となった。『よもつ耶（更待月のこと）』（海邦智子）は死に近いタクシー運転手の車に次々と乗客が乗り込み、はかない人生のさまざまな局面を見せていくという構成で、リアリズムを超越した幻想的な作風が効果を挙げている。最後に乗り込んできたのは主人公の亡くした妻と子で、そのまま車は黄泉の国に旅立っていくようだ。単なる思いつきの幻想譚ではなく、そこには作者の確固とした世界観、死生観がこめられていて、

揺るぎのない作品世界を構成している。『光復香港』（鈴木友範）はぼくと同世代の書き手で、かつての学生運動と現在の香港の民主化運動を重ね合わせた構成に工夫があった。半世紀前の日本の学生運動を描いた部分は作者の実体験なのだろう。現在の香港を描いた部分も作者の体験から生じたものと思われ、双方の世界にリアティーがあった。学生運動を描いた作品は多く書かれているはずだが、現代の香港と重ね合わせることによって、独自の視点が設定されている点を高く評価したい。

他の候補作も充実していた。『鴉』（紺野夏子）は長く消息を絶っていた父親が、実はつい最近まで存命していて、母親とは文通していたという設定で、娘がその父親の住居を訪ねていくところから始まる。娘にとって父親は過去の人だ。ところが父親が書斎にしていたと思われる部屋の窓の外には鴉がいてこちらを見ている。鴉は父親の姿を探しているようにも見える。そのあたりから、家族とは何かという深く重いテーマが、重厚な文体とともに読者の胸に迫ってくる。『水水母』（木山葉子）も濃密な文体が作品世界を支えている。別れた夫が大量に保有していた学生時代の女友達からの手紙が、ヒロインの胸に癒しがたい傷を穿っている。その過去へのこだわりが、精神を病んだような幻想的な断片が交錯する独自の作品世界へと読者を誘う。リアリズム作品と見ると辻褄の合わない点が多く他の委員

の賛同を得られなかったが、ほくはこの作品の独創性を評価したい。

時代の空気を描いているという点では、『村上君と優のこと』（若栗清子）に注目したい。ロシアのサハリンから来たという金髪の少年と、母子家庭の息子との交流を描いた作品で、ありきたりな差別を受けながらも前向きに生きようとする少年たちの姿が明るく鮮明に描写されている。とくに金髪の少年が髪を黒く染め、日本人の少年が金髪になるといふ展開がおもしろく、小説としての楽しさがあった。『夢で逢いましょう』はいくぶん軽い文体で、不本意な閉職に回された中年女性が、夢と幻想の中にのめりこんでいく姿が描かれている。文体が軽いというよりはリーダーブルなのだが、それが災いして軽い読み物と思ってしまう飛ばされる惧れのある作品だ。しかしじっくり読んでみると、幻想にすがらざるをえないヒロインの孤独感が伝わってきた。なかなかの秀作だと感じられた。

他の選考委員の評価が得られなかった『サイクロイド』（荻野央）に、ほくは一つの可能性を感じた。サイクロイドというのは直線上を転がっていく円の円周上の一点の軌跡を描いた曲線なのだが、数学になじみのない人にとって聞き慣れない用語だろう。作者は詩人としての素養のある人のようで、この作品も散文詩と違っていい文体で、断片的な叙述がアトランダムにつながっていく構成になって

いる。それでもテーマはある。二人いる娘のうちの一人が障害をかかえているのだ。ほくは障害者本人や家族が書いた作文コンクールの選考を十年くらい続けているので、障害者の悲喜こもごもの日常については数多くの作品を読んできた。そこにはさまざまな世界観が描かれているのだが、は一致している。この作品にも哲学がある。しかしそれはヒューマニズムとか、運命を受け容れる諦念とかいったものとは隔絶した、きわめてユニークな視点だ。書き手が詩人であり、また数学にも見識をもった人で、そこから詩的な想像力とサイクロイドという図形のもつ不思議なイメージが結びついた、独特な詩的な言辞が次から次へと心地よく紡ぎ出されて、魔法のような作品空間が現出することになる。残念ながら既存詩人の作品を引用したところが二箇所あり、効果を挙げているようではないながら、作品としての独自性を損なっているように感じられる。また詩的なレトリックが高踏的で多くの読者がついていけないという難点は確かにある。だが小説というのは本来、何をどう書いてもいい自由なものだ。読者がどう思おうと、これを書きたいという切実な思いがあれば、書きたいことを書けばいいのであって、作品の評価などは二の次というべきだろう。こういう作品が掲載されるところに、同人誌というものの存在意義があるのだと強く感じた。



こはま きよし
1950 沖縄県生まれ
劇団四季など様々な職を遍歴
87 作家中上健次に師事、マ
ネージャーを務めるかたわら
文学修行
88「風の河」で文学界新人賞
を受賞
他の作品に「消える島」「後
生橋」「光の群れ」「火の闇」
などがある

同人雑誌の質の高さ

小浜清志

今回は七作品と少し多めではあったが、どれも趣があり同人誌の質の高さを覗かせてくれた。

「村上君と優のこと」若栗清子

五月の午後、という独特な書き出しで始まるこの作品はウラジオストックから転校してきた村上ミハイル君と息子の優の付き合いを見守っている母の視点から展開していく。

「私」は二年前に離婚してフラワーアレンジメントの職を得て優との二人暮らしを始めたばかりである。五月の午後に優が友だちを連れてきた様子があったので茶菓子をお盆のせて運んで行ったとき知らない国から来た少年であることを知る。その日から連日のように白金に近い髪の少年は

2DKのわが家を訪れる。

それから半年くらい経って事件が起こった。優が叫ぶ「毎日同じ服を着ている。汚いって、女子が」二枚のセーターを交互に着せていたが女子の目にはダサイ汚いとしか映らなかつたであろう。「私」はすぐに車をとばしてデパートへ。優が心配するほどにブランドの服を買いあさる。この行動もそうであるが、作者の優しさが至る所にちりばめられている。六年生になつてもミハイルは毎日のように通ってきて時々夕飯を共にするようになる。決して裕福な生活をしている訳ではないが、優の友だちということでもミハイルをいつも歓待する心の豊かさは卒業式にも現われる。ミハイルの母親を色々と詮索する声が聞こえる。私はそれらの声に対抗するようにユリアさんの隣りに座り、生まれたばかりの赤ちゃんの可愛らしさを手ぶり身ぶりで伝える。そのような行動をすれば周りから揶揄されるかも知れないが、私にはどうでもいいことで、ユリアさんの孤立に寄り添いたい。その心は優にも受けつがれていて、中学生になりミハイルが「北方領土を返せ」と同級生に言われたことを聞き、ある日突然に黒髪を金髪にする。だが、ミハイルも黒髪に変え、二人向き合ったとき大笑いをして髪は二人とも元に戻るといふ出来事でも相手を思いやる心のあり様がこの小説の美しいところである。

「鴉」紺野夏子

戦の理由を見い出すことはできなかった。

「水水母」木山葉子

水母と海水の明確な区分ができないように、この作品も現実なのか妄想なのか判然としないまま展開している所が最大の魅力であろう。結婚式をあげて三日目に目にした夫の高校時代の女性川島芽子からの大量の手紙から妄想が走りだす。

出張から戻った夫に手紙の束をさし出し処分してと訴えるが、安易に頷いてくれない。仕方なく夫が手紙を焼いていると姑が起き出してきて夫のしていることを咎め、絵里子をなじった。絵里子の目には部屋にある置き物さえ川島芽子の贈り物に見えてくる。手紙に出てくる若村という男が二人の結婚を祝いたいと言って待ち合わせをする。若村らしい男の近くで絵里子は待っていたが、現われた夫は芽子のいる方へかけていき、二人の会話がはつきりと聞こえる。これは不自然な書き方ではないかと思つたが、このことすらも妄想だとすればつじつまは合ってくる。

手紙すら妄想で作った産物ではないかと想像してしまふ。小説の力にあらためて感動した。

「『よもつ耶』〜更待月のこと」海邦智子

当選作になった作品であるが、まず文章とは何でも作りあげることができるのだということに驚いた。この世とあの世の境に建つ「よもつ耶」で練り広げられる男の苦悩。

中学生の時に家を出たままになっていた父の家を見て来て欲しいと入院した母から頼まれ芽子は戸惑う。何十年も前にいなくなっていた父が生きていて、母は連絡を取っていた。芽子は両親のなれせめに想いをはせ、夫婦の有り様の不思議さを感じながら、母の頼みで二度目の父の家の訪問をする。そこで大家さんと出会い父の現状のすべてが解明する。年上の母は代々医者之家に育ち、自らも医師として生きている。母の結婚を祖父母は快く受けとめたが、周りはそうでない者が多かった。だから親類の集まりがあると着慣れないスーツを着て、席の隅でコップを傾ける父を芽子はひっそりと眺めるのが常だった。

のけ者のような父は親類の中ではカラスのような存在ではなかつたか。また、社会的にも立派な肩書きの母とは違い、大工仕事得意な父は母とはあまりにも不似合いただつたから家を出たのではないか。作者の筆は冴え、タイトル通りの読後感を残してくれた。

「サイクロイド」萩野史

大失恋から小学生の頃の団体競技を思い出す。円転するリングの中の自分に接近してくる大空の太陽と雲。くるくるまわるリングの永遠性。そして、二人目の子供が障害を持つて生まれてから、平凡に円転していた生活の連続が二番目の世界に強制的に局限される。色々な挑戦を試みていることは理解できるのだが、円転したことのない私には挑

妻子をガス自殺でなくした男に、真湖ママが釘を刺す。「あんな、後追って死ぬ気でしょ。そんなこと誰も許さないわよ。あんなあの世の扉が開くまで、その日が来るまで生き抜くの、どんなに孤独で苦しくても」

そして、男はよもつ耶の住人となり、タクシーの運転手をして糊口をしのいでいる。客待ちの場所はいつもの坂の上。深夜だというのに老婆が乗り込んでくる。老婆は初雪が降ると死んだ主人の墓参りに行くという。その婆さんが指につけていたアメジストはかつて男が二月生まれの女房に贈ったものだった。

不思議な婆さんに乗せてから一ヶ月位、中年の女性がタクシーに乗り込んで来た。行き先はジャンプ台のある大倉山。女がジャンプ台で練習をしている息子の思い出を淡々と語る。短いラインの文章を残して息子は空へ消えたという。そして、次々と現われる乗客の誰れもが辛い過去をひきづり懊悩しながら生きていることを知らされる。

最後に死んだ女房と息子が乗り込んでくる。心地よいリズムの文と、あり得ないがくつきりと浮かんでくる状況に文学の気高さを感じた。

「夢で逢いましょう」天野いづみ

夢の中で男と交わっていた。夢の中で感じるのは初めてだった。その快感がすさまじかったので、下着にそっと手を入れてみたが、何の変化もなかった。書き出しのインパ

は「サイクロイド」と「水水母」「よもつ耶」「更待月」を高く評価し、中上氏は「よもつ耶」「更待月」と「光復香港」を評価した。小浜氏は「光復香港」を買っていた。私はどれもいい面があり、捨てがたいものがあったので、悩んだが、「光復香港」の重い量感と、「よもつ耶」「更待月」のユニークな表現は、称揚を外すわけにはいかないと、最後に提案された二作受賞に同意した。このように分裂したのは、それぞれがいい作品であることの証左でもあるだろう。

鈴木友範氏の「光復香港」(季刊作家「99号」)は、出張先の香港で民主化運動の弾圧に巻き込まれていくのと同時に、自身の学生運動を回顧し、反抗の情熱の意味を問いつつ作品である。香港の学生たちの反抗の姿が鮮やかに浮かび上がると同時に、自身の革命へ投じた情熱の挫折の辛酸と苦澁が交錯して、理想に向けて抵抗する人生の陰影が掘削される。結局は圧殺されるしかないその結末に、人間としてどう希望に繋げるか、胸に受け止めるべきものは提出されている。全共闘世代も、今しか書き残せない時期に入っている。さらに書き続けて残すべきものを残していったほしい。その願いを込めて、「まほろば賞」に強く推薦した。同時受賞となった海邦智子氏の「よもつ耶」「更待月」(「札幌文学」91号)は、発想が独特で、タイトル、ペンネームからして変わっている。ルビなしでは読めない

クトのすごさに引き込まれた作品だった。

「光復香港」鈴木友範

現代の香港と過去の学生運動をからませた力作である。描写も構成も素晴らしく、私は一番強く押した。香港の有り方もかつての学生運動も歴史に潜んでいる不条理との戦いであるが、それらは時間の流れに淘汰されていくだろうとの予感が、この作品の素晴らしい所である。



いがらし つとむ
1949 山梨県生まれ
早稲田大学文学部文芸科卒
79「流論の島」群像新人長編小説賞
84-90 カンボジアを中心に東南アジアを取材「東南アジア通信」編集長
主著「緑の手紙」(読売新聞・NTT プリンテック「インターネット文芸」最優秀賞)・「鉄の光」「ノンチャン、NONGCHAN / 聖丘寺院へ」「破壊者たち」

重い量感とユニークさ

五十嵐勉

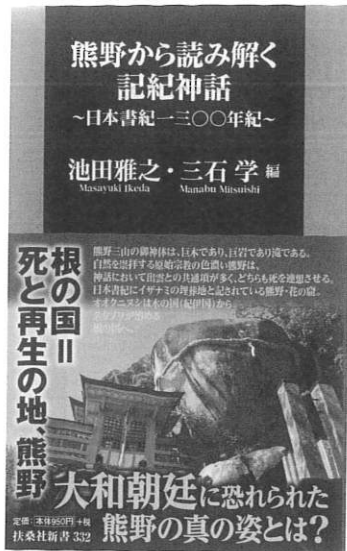
第一六回まほろば賞は、結果的に選考が三つに割れた。

「鴉」「水水母」への支持、「サイクロイド」「村上君と優ること」「夢で逢いましょう」への支持、「よもつ耶」「更待月のこと」「光復香港」への支持と分裂した。三田氏

言葉が、むしろ独自の世界を切り開いている。そしてその風変わりな世界の底に、死へ旅立っていく者の深い悲愁が流れている。この死者を包み込んで流れる旋律に、魅力がある。葬送の美しい調べがあるところに、胸底への刻印がある。これを大事にして、この世界造形を持続していったほしい。

河林満賞に輝いた、紺野夏子氏の「鴉」(「南風」48号)は、地味な題材だが、彫拓の手腕には、注目すべき力量がある。これで三度目の優秀作登場になるが、どの題材も鮮やかに処理して、小説作品として形を与える技量が高い。しかもだんだん精度が上がっている。一読した時よりも、読み込むに従って、精緻な味わいが奥を増してくる。失踪した父親の最期を、空家に棲む鴉との交誼に託して、枯らせるように終わるシーンは、人生の乾いた一つの結末を象徴している。あの世から、河林満も授賞を喜んでくれていてと思う。

読者賞を獲得した天野いづみ氏の「夢で逢いましょう」(「朝」42号)は、タイトルが一見歌謡曲を想わせる軽さを有しているが、中身をよく読むと、練りあげられたわかりやすい文章の奥に、厳しく磨かれた言葉の艶があり、それがある安定した構築を示している。長年の鍛錬による表現力であることが窺われ、酔いに誘われる奏鳴感を宿している。更なる結実をめざして、創作を持続してほしい。



を助け、寄り添うところには共感する。

萩野央氏の「サイクロイド」は、最も難解であり、一般的な読者には少々読みにくさが残るだろう。主人公は、「不完全」な家族を完全にするために、この「円」すなわちサイクロイドを重ねているようで、実はこんな円自体、本当は不要なのだ、叫んでいるのかもしれない。閉じられた円環は美しいかもしれないが、無言Vだと作品は告げる。

木山葉子氏の「水水母」では、夫が処分することの出来ない千通もの女子高生からの手紙が、潮が引いた砂浜に数多に広がる水水母に重なった。水水母は死んでいるようにも生きているようにも見ええるが、過去の手紙もそうである。だから、「ぶちまける」のだ。

選考会が終わると、まだまだ夏はこれからなのに、一瞬涼しい風が吹いた気がした。



第16回まほろば賞選考会風景 2022.7.17 大田区民プラザ会議室で

いる香港学生が、自分の家のヘルパーにはぞんざいな態度をとるというアジア的な矛盾にも注目したい。

もう一作品のまほろば賞受賞作を紹介する。海邦智子氏の「『よもつ耶』〜更待月のこと」だ。子供と妻を失い、夜間のタクシー運転手に転身した主人公が、業務を介して出会った人々から、彼らの物語を断片的に聞いていく。いつしか読み手は、このタクシーが、死にたい人に次々と出会うながら夜を走る、すなわち死と背中合わせの乗り物であることに気づくのだ。

この作品の中に登場する坂の上の（よもつ耶）という磁場は、「黄泉比良坂」から来ている。生者の住むところと死者の住むところの境界にあるという黄泉比良坂。記紀では、火の神を産んで死んだ女神伊邪那美尊を、男神伊邪諾尊が、来るなど言われていたにもかかわらず黄泉の国に追っついていき、そうして醜く変化した妻を恐れて逃げ帰り、途中追い付かれ、口論の果てに離縁する場所とされている。だがここでは、愛し合う死者と生者を結び付けるところだ。あるいは、あの世とこの世の間で迷っている者がたどり着くところ。仕事が忙しく一人で悩んだ妻に息子と心中されてしまったという過去を持つ男。男はここを拠点にタクシーを走らせ、待っている。そう、愛する者たちが乗ってくるのを。そのタクシーに乗って三人がどこへ行くかは読み手に委ねられている。あの世か、この世か。妻が伊邪

那美尊のように、まだ来るな、来てはいけなないと、男を黄泉比良坂に留めていた場所は、いずれにしても生半可な所であるはずがない。

「河林賞」を受賞した紺野夏子氏の「鴉」は、他人には絶対に理解することが不可能な、その夫婦だけの独特の関係性が描かれた作品だ。母と別れた父を思い、主人公である娘が鴉と敵対する様子が、人間同士の戦いのごとく生々しく描かれている。家族との繊細な関係、例えば嫌っていた父の作った家具に兄がこだわる場面などは、父への隠れた思いと共に丁寧に描かれ、痛々しさが伝わる。鴉は使者のように不穏な言葉を主人公に告げる。家族でも、いや家族であるが故に介入してはならない領域の存在を黒い羽根で警告するのだ。

他の候補作も読みごたえのある作品が続いた。

天野いずみ氏の「夢で逢いましょう」では、夢の中で起きていることがぼんやりと立ち現れ現実を侵食していく。逃避のように、若い恋の記憶をなぞる夢にのめり込んでいく。現実への一歩を踏み出すラストが素敵だ。

若栗清子氏の「村上君と優のこと」は、ロシアルーツの村上君が光りながら小説に登場する冒頭に、神話的な物語性を感じる。本作が書かれたのはロシアによるウクライナ進攻の前と察しつつも、今であれば異なる形での展開の可能性もあり得ると注目した。また、主人公が村上君の母親

まほろば賞 受賞の言葉 鈴木友範

この度は「まほろば賞」に選出して頂き、ありがとうございます。
 仕事を言い訳にして筆を折りましたが、更に自費出版した本を眺めて悦に入るとい
 形で見切りをつけていましたが、しかし、もっと書きたいという思いが突き上
 がり、数年前から再び原稿に向かつて半年に一作を目標にして頑張ってきました。
 ただ、特にコロナパンデミックのせいで合評会の開催もままならず、先輩
 諸氏の指導も頂けないという制約のある日々に苛立っていた最中の朗報でした。
 仕事柄、異なる国々の歴史や文化を見聞き出来たことは幸いでした。当然に
 も香港現地での目の当たりにした「一国二制度」を巡る聞き合ひは、私もまた書
 かずにいられませんでした。今後も香港を一つのテーマにしていくつもりです。
 一方で受賞ということを意識せず、書きたいものを書くという原点に戻り、
 表現者としてさらなる高みを目指そうと決意を新たにしているところです。
 あらためて感謝申し上げます。

まほろば賞 「光復香港」

鈴木友範



鈴木友範
 すぎき とものり
 1948 岐阜県下呂市生まれ
 73 岐阜大学農学部卒業
 89 ファインアンドソフトテクノ
 ロジー株式会社設立
 代表取締役就任
 2003 自費出版「愛惜の炎」刊行
 05 「季刊作家」同人
 21 小島信夫文学賞県知事賞受賞

まほろば賞 「『よもつ耶』
 更待月のこと」

海邦智子



海邦智子
 みくに ともこ
 1962 函館生まれ
 83 北海道武蔵女子短期大学卒
 業
 83 以後(株)札幌ツーリスト、近
 畿日本ツーリスト(株)、(株)HKワ
 クス、(株)秋吉などに勤務
 2004 札幌文学会同人
 05 北海道鉄道文学会同人
 現在専門学校在学
 「愛しき人」で第9回鉄道文学大
 賞優秀賞受賞

まほろば賞 受賞の言葉 海邦智子

このたびの『まほろば賞』受賞の一報をいただいた時、思わず驚きの声か脳天から突き抜け、歓喜の後の余韻が眠
 りにつくまで私を包んでくれました。全国の多くの同人雑誌作品の中から優秀作に選出していただいた時点で札幌文
 学会同人として代表の田中和夫氏、編集人の坂本順子氏に少しは恩返しできたと思っておりましたが、今度こそ本
 当の恩返しできたと思います。私の創作活動は四十歳で会社を辞めて地元新聞社の文化センター『初めての文章教
 室』からでした。そこで講師であった田中氏に教を乞い札幌文学会に入会させていただき、諸先輩からの厳しいお
 声に励まされて今に至ります。十代の頃から友人たちや家族と一緒に過ごすよりも独りの時間が大好きで自身の内面
 と外面の乖離に途方に暮れたこともありましたが、創作の世界に出会い、今、私は心のままに自由に泳いでいます。
 私の世界に登場する者たちは全てが愛おしい存在であり、時として主人公になります。今作の主人公も前作『孤灯の
 下』での登場は『よもつ耶』の住人の一人にしかすぎず、登場は一行にも及びませんでした。そんな「彼」が、私を
 『まほろば賞』まで導いてくれました。今回の受賞を励みに泳ぎの手を止めることなく、札幌文学会と共に海邦智子
 の世界を創り上げてゆきたいと思えます。
 貴協会並びに貴誌の益々のご発展をお祈り申し上げます。ありがとうございます。



河林満賞 受賞の言葉 紺野夏子

まず、選者の皆様にお礼申し上げます。ありがとうございます。ございました。

あらためて河林満さんの経歴を確かめ、私がおその名を冠した賞を頂くにふさわしい者かと考えました。公務員として生計を立てながら創作活動を続け、文学史に残る作品を生み出した方と、平凡な主婦として家庭を維持し、子育てが終わったところからようやく執筆活動を始めた自分が、どうにも繋がらないのです。

ただ、「私の文学世界」に記されている、「小説にはいい小説と悪い小説があるに過ぎない。自分に切実なものを書くことによって乏しい才能も開かれていく」という、ご意見には深く納得し励まされました。この言葉を胸に刻んでこれからも精進して参りたいと思います。

河林満賞 「鴉」

紺野夏子



紺野夏子 ———— こんの なつこ
1949 佐賀県佐賀市生まれ
九州大学医学部付属看護学校卒
現在は福岡県福岡市に在住
「百日の記」で中上紀賞受賞
同人誌「南風」編集人

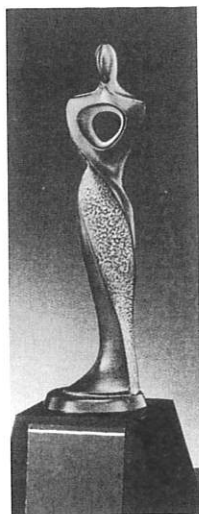
河林満賞の移設について

河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品はこれまで銀華文学賞に応募される小説作品を対象にしてきましたが、銀華文学賞の一時中断以後まほろば賞のなかに移されることになりました。同人雑誌の優秀な作品に贈賞され、受賞者には賞状、記念品、賞金十万円が授与されます。(二〇二二年改訂)

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」／文芸思潮



※まほろば賞は文学を愛好する皆様からの御寄付によって成り立っております。皆様の御支援を切にお願いするしだいです。106

読者賞 受賞の言葉 天野いずみ

書いていてふと疑問に思うのは、同人雑誌に載った自分の作品が、同人や友人以外に読まれているのだろうかということ。今回、全国同人雑誌評に取り上げていただき、その上「読者賞」までいただけると聞き、選考委員の方々はじめ、全国の『文芸思潮』読者の皆様に読んでもらえたことがわかりました。手応えのある、これほどうれしいことはありません。今後もっと言葉を磨き、その言葉が人々の元に届くよう、さらに精進して参ります。この度はありがとうございました。

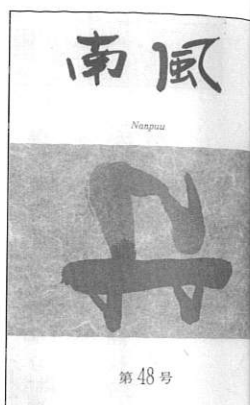
読者賞

「夢で逢いましょう」

天野いずみ



天野いずみ ———— あまの いずみ
1953 富山県高岡市生まれ
77 立教大学理学部卒業
2010 文芸同人誌「朝」に入会
現在に至る 東京都杉並区在住



読者賞について 読者から持ち点制の感想投票をいただき、その合計点数の最高点の作品に読者賞を贈ります。今回は投票金合計金額は66000円となりました。これを得票に従って配分し、各著者に贈らせていただきます。全国同人雑誌振興会



●読者賞への御投票と賞金をお送り下さり、まことにありがとうございました。読者賞は下のよう
な結果となりましたので、ここに詳細をご報告させていただきます。

投票者	村上君と 優のこと	鴉	サイクロイド	水水母	『よもつ耶』 ～更待月のこと	夢で逢い ましょう	光復香港
木内是壽					100		
今田真理子	9	9					
山田真己乃					10		10
渡辺恵理						50	
西田宏明			10				50
和田信子		50					
夏目由美				27		80	
外山寛子	20						
宮脇永子		30					
渡辺 聡						120	
志村 謙						10	20
寒河江仁			10			19	
山田まさ子	1	15		3		1	
木村弥一		16					
計	30	120	20	30	110	280	80

各作品寸評

●「よもつ耶…」は、独特な感性が光っています。「光復香港」は二二六Pに書かれている「僕らの頃は民族自決と独立を掲げることが正義で……」という文に、当時のことに疎い私は「そうだったのか！」と頭を打たれた気持ちになりました。
(山田真己乃)

●海邦氏の「よもつ耶…」は男の人生を語る細かい描写のうまさ引き込まれた。(木内是壽)

●「村上君と優のこと」はさわやかな気持ちになれてよかった。「鴉」は人生の終末が象徴的に書かれていて、胸に残る。どれもみんなよかった。
(今田真理子)

●「夢で逢いましょう」は、わかりやすい文章で一見平明だが、よく鍛えられた極上の文章で、何度でも読み返せる光沢がある。さりげない、自然な日常の中に胸に残るものがある。(渡辺聡)

●「光復香港」は全共闘世代の、残すべき記録。現在もアジアで渦巻く民主化運動と共鳴するものがある。胸に響いてきた。
(西田宏明)

●「夢で逢いましょう」には、懐かしさがある。初恋の中に滑り込んでくる死が、人生の儚さを浮かび上がらせて、高校時代のかけがえのない何か、煌めきをもって戻ってくる。(渡辺恵理)

作品感想

二〇二二年まほろば賞読者賞はこう投票した

●よい作品が多く、投票に苦勞した。

まず「光復香港」は0点とした。

これは全く読者賞にふさわしくない。圧倒的実力を持ち、まほろば賞に必ずや輝く作品だからである。斬新な着眼点があること、現代性、この点において「光復香港」これをおいて他にまほろば賞があるだろうか。

香港のデモとともに、かつての日本での学生運動の頃のデモが語られる。

中国の共産党に信頼を寄せていたことが少しだけ語られているが、こんな数行を読むと私たちの世代はそんな先輩たちを知っているのが胸が痛い。中国の共産党は違う、その熱心な信じきった言葉を今でも思い出す。そういう思い出に触れてくる作品である。主人公と同じく留置場に入れられた先輩方を思い出した。あと、作中の刑事さん、太い万年筆を持っているのが印象的だった。今は取り調べはボールペンである。叩き上げの刑事さんから見るとデモをする学生さんは理想的すぎて敵意を持ったと語られている。読みながら、刑事の節くれだつた指と万年筆が眼に浮かぶような気がした。「光復香港」と隣のページに自分の作品が並んだりしたら、きつと霞んでしまう。

「鴉」——次にまほろば賞の本賞に近い位置にいるのは「鴉」である。かつて自分を捨てた父親、機能不全家族とともに老いや介護の問題が横たわっている。これも今日的な

テーマといえよう。

紺野氏は文章力のある上手い人で、最後のシーン、カラスが鮮烈なイメージを残している。私はこの作品は非常に勉強させて頂いた。短編小説はかくあるべしというような典型的な作品である。「光復香港」がなければ一位になれたと思う。「よもつ耶」更待月のこと——これは幻想的なオムニバス作品で、銀河鉄道を思い出した。作者は鉄道の好きな人のようだ。詩的なので好き嫌いが分かれる作品だと思っ

「サイクロイド」——教養人としての作者の立ち位置が透けて見える。技術的には「」が多いのが気になる。

またわたしは自分が障害手帳2級のせいとか、障害者がテーマとなる作品には逆に辛めになるということもある。なぜ円環にしなければならぬのか、生きることを美しく円にするのか、なぜ？ ギザギザじゃダメなのか。

しかし一方では障害者家族の問題提起をしたということでは採点を高くする人もいるであろうと思う。哲学的な点で好む人がいてもおかしくない。

「水水母」——惜しいところのある作品である。

古い手紙に綴られた、高校時代から続く人間関係に嫉妬するという話である。

女の情念をとらえた作品は今回の応募の中ではこの作品だけである。私は女の情念が描かれた作品が好きなので大変に好みなのだが、そして作者はわが故郷の高知女子大学卒業、採点を高くつきたいと思う。

ただ惜しむらくはラストシーンである。なぜ別れた夫に、

全国同人雑誌最優秀賞 同人雑誌大賞

賞金30万円



同人雑誌大賞
新設30万円
まほろば賞
賞金アップ30万円

乞御期待
第5回
全国同人雑誌会議
全国同人雑誌大賞
授賞式

今からでも遅くはないなどと思うのか。元夫と心ゆくまでな
ぜ話したいのか。高校時代の同級生の女をいつまでも引き
ずっているような男ではないか。そんな男とつとと忘れなさ
い。そうヒロインにアドバイスしたくなる。

ずるずると断ち切れない人間の思いの象徴として水水母が
登場する。絵里子が自分の人生を生きたるためには、水クラゲ
を包丁で突き刺すべきではないか。

未練な、しかしこんな女もまだいることは確かだ。要領の悪
い妹のような絵里子への励ましを込めてのポイントとしたい。
「夢で逢いましょう」——懐かしい青春の香りのする作品で
ある。淡い初恋に近いような男の子との想い出に好感が持て
る。男の子の膝のところはよく描けていると思う。星空の
シーンも良い。

細かい点では、最初のシーンに夢の後、ヒロインの下着を
濡れていたとしたほうが良いと思う。より官能的な気がす
る。ただこの男の子との関係を大変に淡くしたいというので
あれば下着が濡れていない現在の形の方が正解となる。でも
湿っていたとしてもした方が、微妙な感じが出るのではない
か。こういうシーンは作者の体験とは無関係に、作品全体に
どう響くかを考えてほしい。

「村上くと優のこと」——良い作品だが、冒頭の方でつま
ずいた。気になったのは6行目、光をまとった白い少年とい
う言いまわし。一瞬SF小説かと思つて読み直してしまつ
た。すぐにこの少年がロシアの少年で金髪の子だということ

がわかるのだが、6行目でこの「光をまとった」と出てくる
と、読者は混乱する。光というのはやや宗教的にも取れる表
現であるから、何か他の表現にしたほうがよかつたと思う。
もちろん同じ表現でも途中に出てくるのは構わない。最初の
方なので驚いたというだけに過ぎないのだから。他の所には
全く問題はなく、うまい人だと思ふ。全体にパステル画のよ
うな印象を抱かせる。

人種問題も、はじめの問題も、こういう風に甘やかには解
決しないと思う。人の良い学生に理解力のある先生、この物
語の設定は多分夢に過ぎない。でもそんな夢も見えていいら
う。作品が全てリアルでなければならぬという事はないと
思うので、ポイントを入れることにした。

ノーマン・ロックウエルの絵のように夢を語ってもいい、
そう読んだ。

七作品の彩りゆたかに
猛暑に耐えかね、カフェにこもつて文芸思潮に読みふけつ
た。七作の彩り弁当を食べたような気分だ。

一作ごとに作品に話しかけるようにして読んでいく。この
一行が気に入らないとハラを立てたり、逆に胸に染みて涙ぐ
んだり。まさに泣いたり笑ったりの時間を過ごさせてもらつた。
来年もまほろば読者賞に参加したい。応募作タイトルに重
ねて申し上げる。花束みたいな作品たち、文芸思潮で会いま
しよう。

(山田まさ子)

みずくらげ
水水母

木山葉子

幸司と別れて長い月日が流れたが、海の青さも光る波も同じだった。浜と言っても、小さな砂場のような場所、そこは、二、三軒の旅館が立ち並んでいる、人が滅多に来ない入り江の浜で、二十年前に絵里子が来た時は、ホームレスが小屋を建てて籠っていた。

海が荒れると、大量の塵芥が入り江に打ち上げられる。海藻などの切れ端を交え、流れ入ってきた芥は、砂浜の蔓草を覆う。特に浜豌豆はまえんどうだったか、ホームレスの小屋の回りに、やたらと蔓り、やがて季節が変わると、色の薄い昼顔が頼りな気に咲いていた。

よく見かけたのは、近場の浦富うらとみ辺りの漁村の子供らで、汚れた衣服を纏った、三、四人の少年がホームレスをから

その日も絵里子は、午睡のあと、西の方へ雑木林の日陰を歩いて行った。右方から、海の青さが差し込んで来て、やがて、道は下り坂になり浜へと出て行く。そこで、砂道をU字に折れ曲がり、波打ち際を東へと逆に向かうのだが、その辺りは洒落た柴垣など施した、隠れ宿のような旅館が疎に建っていた。

旅館の間の狭い通路を奥の方へと歩を進めると、ぼつかりと開いたトンネルのような空間が透けてきて、向こうに砂山が見える。そこは、絵里子が名付けた「隠れ浜」の入り江だった。

薬品会社に勤める夫が提供された社宅は、戸建てでちょうど、この入り江の浜の南側の雑木林に紛れるように建っていた。家の北側には高い石垣が積まれており、昔の武家屋敷の跡地だというのが、黒い石積みとの隙間から、秋口になると鈴虫やコオロギなどが夥しい数で湧き出てきて一晩中すだくのだ。

その声は幻めいて、あまりの時間の深さに魂を吸い取られるような臙おぼろさを覚えた。

昼間、石垣から北の方を見はるかすと、視界の限りの雑木林で、横広がりにもくもくと木が立ち上がっていて海は見えない。すぐ下の広場には、新しく老人ホームの施設が建っていたが、いつ見ても駐車場のスペースはがら空き

かっていたり、又ある時は、砂浜の凹凸を踏み荒らし、潮の溜りを打ち叩いて、遊びのような自棄やけ気味のような時間の徒勞を見せつけた。

その浜に、絵里子は憂鬱な気分、気分がよくなると、彼らと同じく暇つぶしをした。

夫の幸司が会社を転勤になり、それまで彼の両親と同居していたのだが、折りよくこの浦富海岸に移ることが出来たのは幸だった。

ちょうどその頃絵里子も皮製品を扱っている会社を退職し、激走していた日常がピタリと止まって、何年ぶりに訪れた休息状態にいたのである。

だった。ほとんど人の出入りはなく、時折り入浴に来る老人の姿を見かけるが、雑木林の背後に打ち上がる海潮を直接見ることは出来なかった。

夫が勤務する社宅に転居して来てからの絵里子は、朝も昼もごろごろして過ごした。眠っても眠っても足りることはなかった。その時の彼女の顔は土気色をしていた。本当は、人間ドックなどで精密な検査を受けるべきなのだろうが、それを実行するほどの意欲、ゆとりを欠いていた。いや、ゆとりはあったが、何をしても厄介で、溜まりに溜まった疲労と脱力感で、どうしようもなく、ただ身体を投げだして、放恣ほうしの状態にいたのである。

体の不調と言っても、ただの不調だけではない。結婚して以来続いている抑圧状態が、彼女の身心を破壊していると言ったような有様で、時に呼吸困難に陥るほどだった。夜中でも息苦しさに目が覚め、ガラス戸を開け放ち、空気を入れ変える始末である。部屋にガスが充滿しているわけでもないのに、ガスの臭いが口から出ているのが分かった。それは疲労が病へと進行している証だったのだが、それでも働き続けたいという願望は消えず、職場への復帰をめざして養生に入ったのである。

絵里子には、差しあたり生活に対しての不満はなかった。それは、夫の幸司に対してもそうだったのかも知れない。ただ一つ問題は彼の周辺に絵里子を受け入れない疎外

感を感じていたことである。それはこの街に足を踏み入れた瞬間に感じたことであり、そのうち絵里子に鬱を投げかけてくるものの正体を掴むことになったのだが。それは夫の部屋の筆筒の引き出しに詰め込まれていた大量の手紙の束だった。この手紙の差出人は川島冴子という名で、見知らぬ女性が書いた手紙に、絵里子は取り憑かれてしまったのである。

今回の転居でも夫はこの手紙の束をダンボールに入れて持ち運び押し入れに隠している。

事の経緯を詳しく言うと、結婚式を挙げて三日目に絵里子の結婚は呆気なく壊れたのである。この川島冴子と言う女子高生の手紙によって総てを失ったのだ。絵里子はあの日、自分の顔が振られて、病的に歪むのをありありと見た。血の気が失せ、顔面がみるみる老妻のような老け顔になってゆくのをはつきり見ている。鏡に映したわけではないが、なぜかリアルに自分の顔の変化が見えたのだ。眼は窪み、眉間に皺が出、頬は瘦け、みずみずしかった顔の表情が振れ歪んでゆくその刻々の変化を。あれは、意識の中だけのことではない。後で実際に鏡に映して見た自分の顔は、老婆と化していた。

それは、まさしく彼女が大学を出た春のことで、颯爽として人生の憂いなど微塵も付着していないはずの絵里子が突然襲われた悲劇であり、その悲劇は見知らぬ一人の女子

よくなこの手紙の束は、階下にいる彼の両親の素振りの素気なさと共に、絵里子を奇妙な具合に襲ったのである。

新婚の部屋と言うにはあまりに粗末で、つくづく見渡す六畳一間は赤茶けた襖に、ポロポロの畳が敷かれたままで、西の窓から響き入る車の騒音と埃と乾きが、渾然とした状態だった。これから始まる甘い新婚生活などという実感は湧かない。絵里子を快く受け入れない階下の老夫婦の存在も含めて、それからは奇怪な事の連続に終止したのである。

この家に曾て住んでいた有象無象の人間らの影を追い、彼らに関する物をあれこれと物色し、それでも暇を持てあまし、階段の踊り場の壁に掛っている、夫の幸司が高校生頃の頃描いたと思われる油絵を眺めた。窓の外を埋める雑木林、それに続く雑木林の絵である。外観と内観の雑木の息苦しさに、枯れ色の木の葉が渾然と交わり、部屋は鬱陶しく、嫌になって、つと踊り場を離れ、ギシギシと鳴る古びた階段を上がって行った。

廊下の中途に、無造作に小筆筒が置いてあった。その前に来て立つと、筆筒の背後に、丁度暮れ方の日が差し入っていた。

「こんなところに筆筒なんか置いて」と妙に腹立たしく、思わず、引き出しを開けた。何か束ねた物が大量に詰め込まれていた。書簡類のようで、四括りほどの数があつ

高生が綴った手紙の所為だったと言うと人はどう思うだろうか。後で考えると、あれは予め仕組まれていた事だったのかと。それで呪いにかかってしまったのかと思うのだが。呪いと言っても必ずしも恐怖を意味するものではない。絵里子の驚きは他でもない、千通もの手紙を幸司に向けてせつせと書き送った女子高生の実に健気で弛みない心情であつて、実直で素直で、純な女生徒のこの手紙は、何の非もなく飽きることもないもので、思うに一人の女生徒の日常が綿密に綴られていたと言うことで、絵里子の心を捕え、哀れを呼んだその女子高生の手紙が何なのかを解明して納得するには時間がかかった。

〈川島冴子〉この女子高生が書いた手紙の束は、絵里子が幸司と結婚して三日目の、新婚生活が始まったばかりの部屋でみつかった。幸司は結婚式を挙げた次の日に出張して不在だった。絵里子は一人二階の部屋に籠っていた。

がらくたが残留する室内に、白いレースのカーテンを施した本棚があつて、その中には少女雑誌や、彼の少年時代の読み物の、「怪盗ルパン」なども収納されていた。壊れたオルガンなどもあり、絵里子が一日部屋に籠っていても退屈することはなかった。一通り、部屋の中を物色し、思いがけなく何括りかの手紙の束を見つけた時はちよつと戸惑った。絵里子の暇を弄ぶように踊りだしてきた闖入者のた。

幸司の兄姉は六人もいて、その上、叔母たちが巣立っている家だ。それぞれの者に関する書簡類が、束ねられ残されているのだと思つた。姑は、こういうところはきちんとしておられるのだろうか。この家に存在する重厚な人間の歴史を羨ましく思い、絵里子は、自分の家の単純な単一家系のそれと比べた。

一括りずつの書簡類の束はかなりの嵩の物であり、それらの中にどういふ内容の物があるのかと、ちよつと覗き見る程度の試みに、手を差し入れた。一通を抜き取り、裏返して差し出し人の名前を見た。〈川島冴子〉という女性の名だった。それから、絵里子の手は忙しく動き、次から次へと手紙の差し出し人の名前を確かめた。みな同じ、川島冴子という名だった。絵里子は、部屋じゅうにそれらの手紙の束を解き放ち読み更つた。いや、本当は何通か読んだだけで止めた。何通読んでも、同じような内容だと分かったからだ。この女子高生の筆跡は、実にすっかりしていた。文章も巧みで、その書きぶりには一目置くほどだった。冴子という女生徒に、並みでないものを絵里子は感じ取った。もし、手紙の文面が、れっきとした恋文だったなら、ある意味納得しただろう。しかし、そうではなかった。高校生の子の綴る内容のものだから、あからさまな表現はしていないにしても、全体からして見えてくるも

のは、川島冴子という女生徒が、自分の日常を細かに綴った日記風の手紙であり、それ以外の何物でもなかった。幸司と同じ、西山高校に通う一級下の女子高生「川島冴子」。彼女は、自分の日常を生真面目に書き綴って、毎日幸司宛に封書で送っているのである。奇妙だと思った。一日の大半を二人は同じ時間を共有しているはずだ。何故こういうことをしたのか。

冴子は、くる日もくる日も、幸司に手紙を書く行為をづづけている。それが絵里子には解明できなかったのである。同じ高校に通い、幸司より一年下のクラスにいて、学校での出来ごと、放課後の部活のこと、学校から帰ってからの時間の過ごし方など、余すことなく自分の行動の一部始終を書いて、わざわざ手紙にして改めて郵便で送り届けているのだ。この女子高生には上田幸司という男生徒はどういう存在だったのか。不可解な形の女子高生冴子の手紙は大学に入ってからも続いているのだ。

二人は、別々の大学へ進んでいる。理系と文系に分かれたが、旅行などもしている。特に印象に残った場面は、足摺岬の椿のトンネルの道を行く二人の様子を描いた下りだった。絵里子は、その描写に引き込まれた。紅い椿が咲いている岬の径を歩く少女、白い帽子を被った冴子が、カメラを構える幸司の前に立って頬笑む。折りしも隣の大学との交流イベントの海辺で、幸司と出逢った絵里子だった

「それでも否よ」

「じゃあどうすればいいんだ」

「私に失礼だと思わないの。私たちが居る部屋に、彼女の手紙の束を置いておくなんて、処分すべきよ」

「それはできない」

「なぜ出来ないの?」

「なぜでも」

二人は、しまいに激しい言い合いになり、

「手紙を焼いて処分しないなら私が去ります」

そのようなニュアンスの言葉を、ぐじぐじと絵里子は言った。幸司は、仕方なく階下に行くと、土間にある古いカマドで、手紙を焼き始めた。姑が起きだしてきて、幸司のしていることを咎め、絵里子を詰った。手紙の束を、以後彼がどうしたのか、どこかに隠したのか、表にだすことはなかった。

新婚の部屋の、そこいらあたりから、虫が這いだしてくるような不快感、違和感に苛まれて、それから落ちつかず急に悲しい気分陥ったりして、絵里子は手紙の中の女と向き合うようになった。冴子の手紙が出てきてからの絵里子は、幸司と冴子のその後を追うようになったのである。反面、夫婦の現実の生活は希薄で、逆にそれ以後は、冴子と幸司の関係が微妙な係わりで動きだし、二人を取りまくかつての高校時代の部活の連中の者らとの係わりにま

が彼に何の感情も持たなかった。

ふと目を上げると窓の背後の雑木林は、夕陽に赤く染まり日没が迫っていた。絵里子は、読みあぐねた手紙をそこいらじゅうにぶちまけて、裏の雑木林の中へ駆け出しに行った。林に紛れて建つ神社の石段を上り、北の方に薄く水平線を引く海を見て立った。それから日が暮れるまで、身動きもせず絵里子は海に向いていた。雑木林の道を、川島冴子が自転車漕いで来る制服姿が眩しく浮かんだ。

出張から帰った幸司に、手紙の束を指さし、「こんな物がこの部屋に置かれているのはおかしい。処分するべきよ」と言った。幸司は、慌てて申し訳ないと言いつつかと思っただけ、意外なことに、顔を擧めうやむやにして済ませようとした。処分するとは言わなかった。その態度に絵里子は驚かされた。

幸司にとって、冴子からの手紙は処分しなければならぬ対象物ではなく、絵里子との係わりにおいては、もちろん無関係であり、このことで絵里子が、二人のことを云云すること自体が間違っているのだ。彼との言葉のやりとりは、あからさまに食い違い、逆に彼女の手紙を絵里子が盗み読みした事に対しけしからんと。彼と彼女のこれまでの時間に、他者が口を挟むことは間違っているのだと、こんこんと言いつつ含められた。

でも、部外者の絵里子は割り込んで、思わぬ痛手を受ける羽目になったのである。

改めて部屋を見わたすと、そこいらの置き物、飾り物が皆冴子と係わりのあることがよくよく分かるのだ。例えば、高校時代に既にその場所を占めていたと思われる、彼の机の上の蠟細工の蟹の飾り物だ。まさしく、手紙の中に出てくる蟹であり、彼らが遊んだ、夏の小島での一日を物語る。それは、放課後部室で冴子と幸司が、二人で作上げた細工物の蟹で、生きた状態で閉じ込められた蟹は、今も泡を吹いている。蠟の中の蟹を覗き込むと、夏の小島での、彼らの遊びが手に取るように映しだされた。

幸司の日常に、それからは冴子の手紙の中の登場人物が次々に現われた。中でも、特に若村という男は、幸司と冴子の間で常に関わり、二人の関係を邪魔した男として手紙の中に登場しているが、絵里子でさえこの男のことは、じれったく思えたほどで、鈍感で、恋愛に関して、無知で恥知らずで、こんな男に幸司と冴子が振り回され、時間をかけて青春の道を遠回りしたことが、なぜかもどかしく、呪いたくなるほどで、そういうふうな自分の気持ちを抱えながら、自分がいったい何を憤り、何を感じているのかさえ分からなくなる。

しばらく経って、若村という男が絵里子と幸司の結婚の祝いをしたいからと言って、夕食に誘ってきたのは皮肉なことだった。

三人は、柳通りのバスターミナルで待ち合わせた。絵里子が会社を出て、ターミナルに着いた時は、柳通りにネオンが点り始めていた。勤め帰りの人々が、南の通りの繁華街に満ち、バスの発着所に来て立つ、絵里子の前に男が背を向けて立っていた。その男が、絵里子と幸司を招待した若村だと思ったのは、牙子の手紙に、しばしば登場してくる人物に風采が似ていたからだ。ネオンの下で、男は直立して動かない。

街は灯に潤み、心地よい風が吹き、その時刻に人待ち顔で立つ男が、若村でない筈はない。

絵里子は、改札口の壁の陰に寄り、ターミナルの北の入り口を見た。まもなく幸司が入り口に現れ、こちらへと向かってきた。絵里子は手をあげた。それと同時に、幸司がいきなり駆けだしたのだ。絵里子は、自分に気付いて彼が駆けだしたのだと思ったが、彼は絵里子の前を素通りして、バスの発着コースを横切り、大声で何やら叫びながら、西の柳通りの並木へと駆けて行く。折りしも、柳通りの向こうの方から、白い服を着た女が駆けてくるではないか。二人は、駆け寄り、手を取り合い何かしゃべっている。「元氣だった!」

三角関係は続いていて、その日絵里子と幸司を食事に誘った若村は、幸司が結婚した女、絵里子の目の前で、幸司と牙子の関係を暴露しようとしたのか。先輩風を吹かすこの男が、木偶の坊のように見えたが、そうではないのかも知れないのだ。

若村は、ネオンに向き立ち愚鈍を演じ、その夜、絵里子と幸司を招待した山の料亭で、鯉料理に箸をつけないで、ほとんど口をきかなかった絵里子の、あまりの無愛想に呆れたらしい。後日、幸司に、我がままな女だとレッテルを貼ったという。

砂浜の潮溜りで、子供らが水をかけ合い、ホームレスの男が、濁った目で海を見ている。彼らは、誰も来ないこの浜に、時々やって来る女が、普通ではなく、虚脱状態であることを察しているかのように、遠まきに見遣っている。

なんの関わりもなく、それとなく自分のことを見ているホームレスと少年らに向き、絵里子は彼らが自分の存在を認める限界の距離間について、項垂れ、時々、毀れた貝殻を拾っては打ち捨てた。少し行って波打ち際に寄ってくる波に添って立つが、息苦しい呼吸を繰り返すだけ。彼女は海を見ていなかった。海は確かに傍らにあるが、その女、絵里子には、気怠く波音が聞こえない。

風の時刻、薄紅の小さな桜貝が、ひらりと波打ち際に打

「ええ」

ずっと向こうにいる筈の、二人の会話が鮮明に聞こえた。絵里子のすぐ前に立って、繁華街の人ごみを見ている男が、その光景に気付かぬかと、気を揉んだが、男は相変らず街の通りに向いている。

牙子と幸司とこの男が、三角関係にあったことを、例の大量の手紙の中で知っている絵里子は、共に肩透かしを喰った形で、バカみたいに竹む男を哀れみ見た。

柳通りで、感激の声をあげている牙子と幸司を見遣り、絵里子はなんともちぐはぐで腹だたしい気分陥った。牙子は、ひとしきりしゃべると、そこからすぐ元来た道へと取って返した。

あの日のことをよくよく考えてみる。牙子は、なぜあの時刻に向こうからやってきたのか。幸司が来ることを前もって知らされていない限り、それはできない筈だ。幸司もまた牙子が柳通りを来ることを知っていた。

幸司が入ってきた北の入り口から、西の柳通りは、絶対に見えない。それなのに幸司は牙子が来ている柳通りに向かって駆けだして行ったのだ。このトリックが絵里子には解明できない。あの夜、傍で背を向けて立っていた若村という男が、あらかじめ二人に知らせておいて二人を引き合わせたのだとしか思えない。

牙子の手紙の中にチラついていて、牙子、幸司、若村の

ち上げられていた。絵里子は、牙子の手紙の中に封じ込められた桜貝の風景を見ていた。手紙の中の桜貝の歌は、美しく忘れられない。あれは、宇崎の海だった。幸司の大学の近場にあるらしいその海岸で、二人は桜貝を拾っている。牙子は後日、その時の情景を詳しく記し、手紙にして幸司に書き送っている。彼女は、一日も欠かさず彼女の日常を書き、それが幸司と過ごした一日であっても、その日のことを細かくしるし手紙で送るのだ。

——桜色の貝。殻長二センチほどで、殻は薄くて壊れやすい。後端は細く伸びて、嘴のように尖っている。美しい紅色をしており、個体によって色の深さや鮮やかさはさまざまで、中には白色の個体もあるが、まとめて「桜貝」「色貝」「花貝」とも呼ばれている——。

牙子の手紙の中には、桜貝の分類が詳しくなされている。浜辺で見つかった片殻や、破片のことまで書かれていた。そこには、彼女の知識が意外に情感の豊かさを見せる下りがあった。彼女は、「山家集」の中の、西行の歌を引用し、その日の桜貝の様を西行の歌にことよせて書いている。

〈吹く風の花咲く波のをるたびに桜貝寄る三島江の浦〉西行。三島江の浦は、彼女には幸司と遊んだ宇崎の浦に重なるのだ。風が桜を散らすように、海の風に立つ波が、桜貝を浜へ打ち寄せると書いていた。

絵里子は手の平に汚れた襟巻を載せ、海に向いて立った。午後の海は風いでいた。風も吹かないのつべりとした海面は、微動だにしない。新鮮な風が、入り江に吹き入ることもなく、隠れ浜をかこむ巡りの岩山の東の方は、行き止まりで、岸壁で遮られている所せが静かだった。もつとずつと東の方へ、潮の動きは続いているのだが、この岸壁を越えて東側の磯には行けない。潮が、また別の趣きを見せる向こう側へ、岩沿いに荒磯を伝って行くのは困難だった。行けないことはないが、東側の磯に行くには、突き出しが岸壁の下の、僅かな波打ち際を渡るしかない。特に、満潮時には、向こう側の磯を見ることが、潮の動きを感じることにも出来なかった。潮がのた打つ行き止まりの岸壁に、潮の飛沫が白く散っていた。

少年らが、ホームレスと岩山を上がって行く。それを遠目で見ている絵里子は、ふと彼等の後を追ってみたくなった。東側を岩山が遮蔽している際に来て、絵里子は突り立つ岩の隙間から、筋を引いて垂れ落ちる水を見て立った。先に登って行ったホームレスの男が、鍋をかざして水を溜めている。背後に続く少年らは、棒切れで男の尻をつついていっている。少年らの背後に寄って行った絵里子は、磯の匂いが溜まった重苦しい空気の淀みを吸い込み、足下の波が少しづつ引いていく間の遠い律動を聞いた。

ていると、幸司に訴えながら、その若村にも甘え、彼女は常に男たちの中心に身を置いていた。

社会人となっても円陣を組んで、高校時代の続きをしている。たかが高校の部活の仲間じゃないかと、絵里子は呆れるが、彼等は飽くこともなく、睦まじく交流している。冴子の心のうちを解く鍵は、彼女の手紙の中にあり、その手紙を読んだ絵里子にしか分からない彼女の心情、それを知って誰に告げることもできずやきもきしている絵里子である。

彼等の間では、お互いに関する祝いごとなどの集まりがしばしば催されていた。絵里子は、ある日呼ばれもしないのに、料亭にたずねて行った。何を思ったのか、自分も仲間に入れて欲しいと思ったのか、自分でも自分の行動が分からなかった。奥まった廊下から、仲居と呼ばれて出て来た夫の幸司は、会が佳境に入ったところを邪魔されたと嫌な顔をし、奥の部屋を気にしながら、絵里子を追い返した。その時、絵里子は、もう二度とこの仲間になんか近づかないと心に誓った。

ある日、絵里子は、ふと思いついたことがあった。家から出て浜辺の道をずっと東に進むと、浜島という漁村がある。そこが、冴子の実家だと知っていたので行ってみることにした。彼女の母親は、その煉瓦工場でも働いている。そこに行くには、幸司の実家のある古い街を通らな

ホームレスの男と少年らは、小屋に戻ると砂場に座わり、雑木林を背にして火を燃やし、何か訳の分からない物を煮ていた。小屋の背後の林から、落葉がしきりに降っている。鍋の物が煮え、彼等がつついて食べる様子を、離れて見ている彼女に、彼等の笑い声が歪ひびに聞こえた。

季節が変わると、ホームレスの男も少年の姿もなく、気がつく冬が来ていた。砂浜が無人になっても、海はやはり絵里子の意識にはなく、どこまでも視界はがらんどろで、心が元に戻ることはなかった。

人間は、一瞬にして心を喪失するということがよく分かった。

川島冴子の大量の手紙の束をみつめ、手紙を盗み読みした時から、失ったものは元に戻ってこなかった。

あのバスターミナルで、冴子は何をするために向かってきたのか。ただの通りすがりだったなら、柳通りの向こうから手を振ってくる筈はない。夫の幸司もまた、冴子が向こうから来ているのを知る筈もないのに知っていた。この疑問は解決されず、それにこそ総ては集約されるのかもしれない。

それから徐々に分かったことは、冴子を囲む高校時代の仲間が、幸司を中心にして相変わらず、冴子の世話をしていることだった。冴子に片思いを続けている男、若村もその仲間に加わり、冴子の手紙の中で、若村の存在が苦にならなければならぬ。その辺り一帯は、昔の商店街の跡が残っており、絵里子は、結婚当初寒い冬の日など、道路が凍って町から出て行けない時、この古い街の魚屋で、わずかに揚がった魚を買い求めたことがある。

これまでは、彼女の家を確かめてみようとする意思が、絵里子に働かなかつたが、異様に抜け落ちた精神状態で、日々の時間を浪費しているうちに、ある願望が芽生えたのである。

冴子が現在、何に対して生きがいを持っているのか知りたくなった。幸司が、絵里子と結婚して、手紙が書けなくなつてからの彼女が、日々の時間をどのように過ごしているのか。冴子の手紙を盗み読みして、いつまでもそれにこだわっている絵里子に、未だに声を立てずにいる女の心を、暴いてやりたいという残忍さが働いたのだった。

午後になり、やおら立ち上がると、絵里子は自転車に乗り、東の半島へ向かった。社宅から海岸の雑木林沿いの細道を抜けるには、自転車都合がよかつた。砂浜の凸凹の上を走り、時々自転車を押して行く絵里子の呼吸は荒かつた。浜道が、やがて四十五度の傾斜をなす外れまで来ると、へとへとに疲れ、眼の下の冴子が暮らす漁村の家並みを茫然と見て立った。潮の香りがした。

彼女の家は、浜の低地にある筈だった。大きく湾曲した入り江が、村を囲うように潮を湛え、波皺がかがやいてい

る。丘に立って、下のほうを俯瞰していると、心地よい潮風が吹き抜けた。岬は、冴子の暮らしに寂しさを添えるだけの風景のようであるが、そう思うことすら無意味であった。そこには、冴子の暮らしの別の風が吹いていたのだ。絵里子は、ばかばかしくなり、自分のしていることが滑稽で、そして不思議な気持ちになった。それは、この現実が死ぬまで続くということ。そういう気がしたことだ。

ある日曜の午後のこと、珍しく家にいた幸司が、真顔でちよつと磯に行ってみないか、と誘った。彼は、老人ホームの裏の松林を歩き、ホームの裏庭へと続く高校の校舎のある方向へ向かった。彼と冴子が過ごした高校は、日曜の午後ひっそり静まっていた。幸司は高校の裏庭から磯へと出て行く崖の縁を辿りながら、「貝打ちをしないか?」と、無表情に、ぼそりと言った。手には、金槌を握っている。なぜか、不意に恐怖心が絵里子を捕らえた。

雑木林を通り、磯へと出る岩場の道を行き、崖伝いに磯に下り、岩の間を彼は行った。磯は荒いゴツゴツした岩場で丁度干潮の時刻だった。

黒い岩が林立する間を抜けて行って、彼の姿が見えなくなり静寂が漂った。不意に岩陰から金槌を打つ音が響いてきて、「高校生の時、放課後ここに来て、部の仲間とよく貝を採ったよ」。そう言いながら、彼は絵里子に近付き、岩の縁

にくつついている大きな貝を打ち叩き、ことごとく剥がした。「これはカメノテ」と、聞きなれない駄貝の名を口にした。彼の声が、岩の間を吹き抜ける風と打ちつける金槌の音に遮られ、絵里子の耳を馬耳東風にした。

彼等の思い出の景色などに共感はない。「ああ、そうですね」と、言ったようなもので裏返って、幸司の言葉は、みな川島冴子と過ごした青春の時へと繋がりが、絵里子には、いつも待っていた、「別れよう」という言葉が、そこで金槌の音と共に、自分に向けられ響いているように思えた。

死んだ魚の目のような、どんよりとした絵里子の目が、彼の手の動きを空に見ている。

遠いところで潮目が変わり、ザワザワと満ちる潮の音にも、なんの反応もしないでいる絵里子の傍らで、幸司が金槌を振る音が、やたらと響き、そんなことも意味もなく、一日がぼんやりと呑み込まれた。

静かな夏の終わりの海に向き立つ絵里子に、幸司が貝を打つ音は、それからも響いてきて、絵里子のすべてを覆い、空白の時間が流れ、金槌の音は執拗に響き、消えることはなかった。

小屋に座って海を見るホームレスの男と騒ぐ少年らと共にぼんやりと立つ絵里子。そのうちホームレスの男の髪は

こにあることはある。この生き物は、海から来たことは間違いない。そう思った絵里子は、初めて海を見た。

海は、ずっと遠くまで静かに広がっていた。水平線の遙か向こうには鳥影もある。鮮明で青い海がまともにもあった。これは、その青い海が、ぶちまけた物体なのか。その時、ふと、この生き物は、水水母ではないか、と思った。

「夏の終わりの海で、泳いではいけないよ、クラゲに刺されるから」。冴子の手紙の中に出てくる、幸司の言葉が蘇った。

水水母は、百体もあったか。白く透きとおる円盤をひしめかせ、すでに死んでいるように生きている。確かに存在しているのだが、死んだように生きて呼吸をしている。海から離れた物体は、もう海に存在していないのだが、しぶとく水光して、これから存在する物のように、執拗に光っている。この物は砂の上に、そのまま形を残して、乾いてゆくのだろうか、と思った。目や鼻や口を持ち、呼吸し、冴子の手紙の中さながらに、ぬくもりを持ち、今でも夫の部屋の押し入れに隠されている手紙の束が、こういう季節の変わり目には、中味をぶちまけるのか。千通もの手紙の中の言葉が砂に這って蠢いている様に思えた。

あれから何年もの時が過ぎ絵里子は再びこの街へやって来た。そして、この「隠れ浜」に来たのである。

長々と伸び、後ろに紐でだらしなく括られた。男が足を投げだしている小屋を席卷して、萎えた蔓草は、潮風が吹き荒んだ後の、汚れたままの状態だった。そんな日はやけに気怠く、砂浜の凹凸に溜った潮が、鈍い海の色を映し出していた。

昼近くになっても、砂浜には誰もいなかった。潮溜りを横切り、段差になった砂の凹凸を踏んで行き絵里子は立ち止まった。奇妙な光景を見たのだ。銀色に光る物体が、砂の上を一面に覆っているではないか。それは、まるい円盤のような形をしていた。もしかして、宇宙人か何かがやって来て、夜のうちにお祭りでもしたのかと思った。まるい円盤を見てみると、異様な光景で、ギラつき砂の上に張り付いてプヨプヨしている。恐る恐る近づいて、見てみると、まだ生きて呼吸をしているようなのだ。もし、少年らがそこにいたら大騒ぎをしただろう。ホームレスの男と少年らのいない浜で、一人で瞠目している絵里子の足下に、無数の円盤が閃き、ひくひく動き、全体に漂うようなさざめきを立てる。気味の悪い光景だった。一つ一つが落下傘のようなまるい幕を砂にかぶせ、ぴたりと張り付いている。それらの数知れない物体は、どこから来たのか。

見回すと、引き潮の後の砂浜は、むっとする息苦しさをかこっており、視界にはつきり入ってこない海が、すぐそ

全国同人雑誌最優秀賞 同人雑誌大賞

賞金30万円

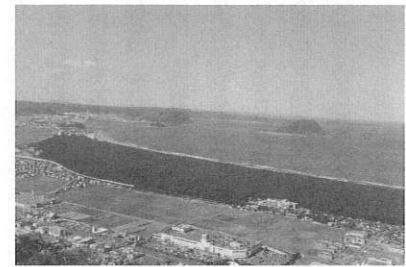


同人雑誌大賞
新設30万円
まほろば賞
賞金アップ30万円



木山葉子
きやま ようこ
1941年 兵庫県赤穂市生まれ
高知女子大学卒業
中学校教師を経て主婦
「木木」同人
2020 「火鈴」で第14回
まほろば賞特別賞受賞
好きな作家 大原富枝

木木 33



追悼 藤崎伸太先生

同人雑誌 2021 木木の会

岩山の陰に、潮がのたうち、絵里子の立つ足元の岩に向かつて流れてくる潮のうねりは間断なく、じっと見ていると彼女の足元に、茶色の漂流物を寄せてきた。それは、千切れたヒモのように、四方に広がってくる。よく見ると漂流物は、破れた鳥賊^{いか}だった。この何げない海の光景は、彼女に遠い日の記憶を蘇らせた。

女子高生の手紙の束から逃れられなかった絵里子が、この街を去り、再びこの街に帰ってきたことと、幸司が今でも、この街の一角でひとり生きていて、牙子を囲む仲間との交流が、どこかで続いているという現実。それは絵里子の幸司に対する思慕を掻き立てた。かつての日この砂浜に毎日やって来て、ホームレスと少年らといた退屈な日々は愛しい日々となった。

絵里子は、辺りを見回し波際にほんやりと立った。寄せ返す波、砂を洗い続ける波のうねり。それは幸司と暮した歳月の実人生を思いおこさせた。

「今からでも遅くはない、彼の顔を正面から見て、言葉と交わし、心ゆくまで話したい、そしてもう一度この街で暮したい」

絵里子は砂に靴をずり込ませつつ海を背に歩き出した。

（「木木」33号より転載）

木木 佐賀県

「木木」とともに歩む

私にとって「木木の会」とは何だろう……。

いつに間にか、三十数年経った。だから私達会員は、それだけの長い年月、交友を持ったことになる。よくこれだけ長い年月を共有し、切磋琢磨し、作品を作り続けることが出来たなと感無量になる。会員皆同じ思いではなからうか……。

「玄海派」を主宰しておられた松浦先生の指導で、「木木」が誕生した。先生なしでは「木木」は生まれなかった。先生が「木木」の生みの親である。

今まで「木木」は、代表が五人代わっている。五人目が私である。同人誌の一号を見ると、先生の指導で発行したので、代表の名前は記載されていない。一号を出した後、先生が一号だけではもったいないと言われ、二号からは代表を決めて発行してきた。

二号から六号の代表が木山葉子さん。七号から一五号が松原夕子さん、一六号から二六号までは小松陽子さん、二七号から三〇号までが井上幸子さんとなり、現在代表が私で、会計が稲葉けいこさんとなっている。私は、一六号から三〇号まで、会計を務めた。会計のほうも、日下部さ

ん、西原茅さん、林さん、稲葉さんと四名が交代している。

松浦川の河口近くに住んでいた木山さんが、岡山に移られたために、七号からは松原夕さんが代表となられた。

木山さんが代表をしていた時は、「木木」の当初でもあり、会員が大勢集まって編集をしていた。誘われ、また興味もあって、私も一、二度はお宅へ手伝いに伺ったが、若い私が出る幕でもないように思えた。それほど多くの会員が集まっていた。皆興味があったのだろう。同人誌の当初の号を見ると、講座を受講した全員の名前が並んでいる。

「玄海派」の同人の方で、講座を受講し、「木木」の同人にも参加している方も何人もいて、現在の状況から考えると、うらやましいような気がする。当初は先生の指導で、原稿用紙五枚だの、十枚だのと割り当てられた。先生から夜によく電話がかかってきた。あの文章はこうしたほうがいいと助言されるのだ。

電話を受けて、目をかけて下さっているのだな、親切な先生だなと、ありがたいと思う反面、三十二歳の、たいした経験もない、未熟な私には、七十歳ほどになられる先生の頭の中にあるような文章は書けないなと、先生とのどうしよもない距離も感じた。私は今の未熟なままの頭と心でしか書けない、そう思うのだった。

木山さんが代表である時、私は、家が近くだったので、よく原稿を持って行ったものだが、木山さんのお宅からは、

松浦川に向いて開いた窓から、川の中にある岩が見えた。干潮の時には大小の岩が幾つも見え、カモメが休んでいるのを目にした。

そのあと代表になった松原夕さんは、私の中学二年の時の国語の先生だった。気持ちの細やかな優しい先生だったが、中学三年の時に、家庭の事情で退職された。「木木」で一緒にすることが出来て、私はこういう縁だったのかと、再び会えたことに感謝した。私の大好きな先生だった。

それから小松陽子さんが代表を務め、私が会計となった。小松陽子さんが「木木」への参加をやめ、井上幸子さんが代表となって、私が会計を引き続きおこなった。現在は私が代表で、稲葉さんが会計をおこなっている。私が代表になったということは、皆が高齢になられたからだ、つくづく感じる。

会計のお手伝いくらいは出来ると思って始めたことなのだが、会計だけで一五年が経った。代表が交代する中で、一人減り、二人減りと去っていく、またあの人もこの人もと、亡くなった。現在会員は八名、当初の二十四、五名から比べると、本当に少なくなった。

何も考えずに、多くの会員とともに、書いていた時が懐かしい。書きたいことだけを書いていた時が、幸せな時だったとも思えるのだ。

毎日テレビでコロナの状況が報道される。高齢者が多いために、次回の「木木」は、原稿の締め切りを少し先延ばしにしている。

「木木」をこれからどう繋いでいけばいいのか、新しい人が入ってくれるのか、考えさせられてしまう。会員が増えなけ



れば、先細りになる。食事会の席上で、「木木」があったから、生きられましたという声が聞こえた。私達会員にとつて、「木木」は常に傍らにあり、なくてはならぬものになっていたのだ。私がこれまで安心して書き続けられたように、会員の意欲がある限り、私は「木木」を発行し続けようと思っている。これは一番最後に代表となった者の運命かもしれない。

自分を振り返る時、確かに「木木」は、生活の折々に、



いつも傍にあった。私は三十二歳の時に、松浦先生の小説入門講座を受講した折り、先生の指導で、「木木」に参加した。二つになったばかりの三女を、膝の上に乗せて話を聞いたことを思い出す。

私は高校三年の時、国家公務員の試験に合格し、公務員として、建設省（今の国土交通省）で、退職まで働いた。建設省が国土交通省に変わったのは平成十三年。建設省、運輸省、国土庁、北海道開発庁が一つになった国土交通省は、本当に大きな省庁となり、私は、面白い体験をたくさんさせてもらった。

新規採用職員として入った武雄河川事務所では、潮止堰が造られていた。陽にあたり、川風に吹かれながら眺めたことを思い出す。

私は三人の子供に恵まれた。子供を託児所に連れて行き、保育園に送り、病気をすれば、夜中に電話をかけ病院に連れて行った。薬を持たせて保育園に送った。雨の日も、風の日も、雪の日も、炎天下の日も、歯を食いしばるような日が続いた。そして子育てと同時に、国土交通省のそれぞれの現場を歩き回ること、私は人生を二度生きて、味わっているような気がした。雪の日、小さな子供を連れて保育園に行く。園庭の雪に雲間から射した朝日が当たっている。私はせわしなく毎日を生きていたが、幸せに満たされていた。山々は、山水画のように美しいのだ。それを「木

たことが懐かしい。

私はその折々に経験したこと、感じたことを「木木」に書き続けた。木木はいつも共にあり、人生そのものではないかと思う時がある。それは会員にも同じように当てはまるだろう。それぞれの人生があり、「木木」があり、私達は、共に歩いてきた。「木木」を介して寄り添い、書き続けた。食事会の席上で、「お義母さんがきつくてねえ」とはしゃいで、皆が笑っている。「木木」があったから、生きられましたと言っている。「木木」は私達の心を浄化し続けてくれたのだ。

私は今、代表をしているが、一番年若いというだけである。誇れるものはない。これからも自分の心に真摯に向き合い、ただ書いていくだけだ。木山さんが、今回も「水木母」で優秀賞を取られたと連絡を受けた。同じ会員として嬉しい。それは私達に継続と意欲という力を、限りなく与えてくれる。

木」は、教えてくれた。「木木」はいつも傍にあった。子供と公園で遊んでも、いつのまにか物語になっていた。河川の事務所、道路の事務所、ダムの事務所と転動して回った。厳木ダムでは本体工事に着手する年に転動し、それから定礎、竣工式と経験した。着物を着て、テープカットの缺を、黒塗りの盆に乗せて渡したこともあった。嘉瀬川ダムに転動した時には、地権者の移転が済み、取付け道路やダム湖の上に渡す橋梁の橋脚を造るのに、職員一丸となって奔走した。それもまた「木木」の小説作品の題材となった。海の中道海浜公園では、誰よりも早く大きな水槽の中で泳ぐ魚を見た。吉野ヶ里歴史公園では、発掘現場を見に行った。縄文終期から弥生時代、大きな環濠集落が形成され、甕棺かめかたがたくさん埋まっている。佐賀空港が出来た時は、国土交通省のヘリコプターに乗り、佐賀県の上空を飛んだ。有明海や北山ダムのある背振山系、佐賀市や唐津市街の上を飛んだ。普賢岳が爆発し、復興事務所が出来た時は、火砕流が流れる普賢岳を見に行った。

嘉瀬川ダムや佐賀国道に通動するようになった時、子供たちは大学生になっていた。私は毎日、朝六時半に家を出た。現在、西九州道路や、有明海沿岸道路が着々と造られている。道路は出来上がった区間が供用開始され伸びて行く。私は今、それらを享受している。退職する年の最後の式典は、道路の開通式だった。職員皆で、開通式を行なっ

『木木』の会

TEL 0955-77-4156

佐賀県唐津市鏡六一

林 綱子方

『よもつ耶』

更待月のこと

海邦智子 みくに

薄野の東の外れに宗派を超えた寺社が寂然と並んでいる。最後の寺の角を曲がると豊平川に向かつて緩やかな坂が続き、その坂の向こうに『よもつ耶』は建っていた。コンクリートの堤防を背にした大きな老舗旅館風のそれは、昭和の初めを思わせる母屋とその横にある銭湯の天に真っ直ぐと伸びる太い煙突の煙が一昔前のどこか懐かしい風情を醸し出している。母屋には月の満ち欠けの名の部屋が十室、その部屋に住む者たちは皆、俗世の名を捨て月の名で呼ばれていた。

世捨て人のように東の間の仮の宿の**はずも男**が更待月の

の息を吐いた。いつの間にか身に染みついた流れは機械じみていて感じる情の欠片もなかった。男は古びた黒茶の木肌こに赤く燃える煙草の先をねじ込んで、小指の先ほどに潰れた茶色のフィルターを投げ捨てた。薄闇がわずかに揺れ、微かに漂う焼けた匂いが、今日も終わつたな」と男の体をすり抜けていった。

男はずっしりとした肩を担いで部屋に戻る途中、見慣れない色白の女に声をかけられた。

「おはようございます」

たつたそれだけのことだった。がらんとした六畳一間に敷きっぱなしの布団が男の唯一の居場所だ。着替えもせず寝ころび、ぼんやりした思考の中で、か細くも妙に澄んだ女の声が耳から離れなかった。歳の頃は死んだ女房と同じくらいに感じたせいだろうか。

「今更、未練のものないだろう。この世の縁はもういらねえよ、なあ、もしかして、おまえ……俺を試したのか？」

空に投げた己の声を男の瞳がどこか優しげにゆつくりと追っていった。

「やっつただなあ……」

胸に広がる止められない思いに男は浅い眠りに閉じた瞳の奥で記憶の底へ捨て去っていた色を拾い集め、愛おしむように淡く塗り始めた。

住人となつて二年と少しが経っていた。待ち望むその日が来るまで、男は坂の上にはぼつねんと灯る時代遅れな木製電柱の灯りだけを見つめ、だからだと緩やかな坂を上り、街へと下りる。タクシーの夜勤を終えて明けきらぬ街を後に瘦せた背を丸め、また坂を上る。男はいつも坂の上で立ち止まり、丸傘の真ん中に灯る裸電球の下で木柱にもたれて果てなく浮かぶネオンサインの海を眺めた。色褪せた橙色に染まりながら生の塊が抜けるほど深い息を吐き、ショートホープを一本、吸い口ギリギリまで空っぽになった胸底に溜めた。濡れた砂と化した重たい背中をざらつく柱から剥がしてネオンに背を向け、薄闇に沈む坂の向こうへ灰色

* * *

ガキの頃に親に捨てられたせいか余計なもの持たない
と、ただただ不器用に生きてきた。本音は人と関わるのが怖かつただけだ。そうしてさえいれば何かを失うことはないからな。そんな俺を……おまえは、いい女だったな。俺と同じで親の愛を知らないで育つたのに、おまえはいつも明るくて、ぶつくりとした唇の右つかわをクツと上げて笑う顔が可愛くてなあ。ああそうだよ、その笑顔に俺はすっかり夢を見ちまったのさ。真湖ママに「店内恋愛はご法度よ！」って店の裏で釘を刺されたけどな。今思えば、それも道理だ、やっぱり夢は見ちゃいけないんだ、俺みたいな奴はよ、なあ、そうだろうか？ それが柄にもなく見ちまった。子供ができたって泣かれた時は、どうしたもんだか俺も泣いちゃった。だってよ、涙でぐちゃぐちゃになった、とびつかりの笑顔をおまえは俺にくれたんだぜ。おまえ、言つたよなあ、「私、産みたい！」「お母さんになりたい」最後に、もう自分も若くないってな……腹くくらなきゃ男が産むだろう。四十過ぎて初めて失いたくないものができたんだ。おまえと腹の子に不自由をさせちゃならねえ、真つ当に生きて、ちゃんとした家族を作つて守る。柄にもなく俺は真湖ママに宣言したんだ。おまえにはそんなこと、面と向かつて口にはなあ……ママは優しく笑ってくれたよ。

それからパーテンを辞めてママの紹介で役員付の運転手の仕事に就いたのはいいが、思ったほど給料が安くてよ、これじゃ間に合わねって、夜勤専門のタクシードライバーの二足の草鞋だ。薄野の街で生きてきた俺にはうってつけだと思つたんだ。おまえは俺の体のことを心配して、そこまでしなくてもって、時々不安そうな顔をしてたよな。俺はただ、家をおまえを小さくても庭付きの一軒家に住まわせてやりたかつたんだ。最初の内は良かった。赤ん坊がまだ腹にいる頃、二人でよくモデルハウスデートをしたもんだ。無口で不器用な俺が自分のためにこんな夢を持つてくれた、私は幸せ者だつて、おまえは笑ってくれたよな。病院で「元氣な息子さんですよ」つて赤ん坊を抱かされた時は怖くて膝は震えるわ、訳わかんねえ涙が出て二度目の泣き笑いさ。ああ、これで俺も一端の男になった、親父になつたんだと力が湧いてきてな……それなのになあ、どこからか、いつからか、分かんなくなつちまつた。ていうかよ、俺にはそれしかできねえ、それが俺なの……馬鹿だよな、俺はどうしようもねえ馬鹿野郎だ。あんなもん、いつかで良かったんだよな、いつかだよ。おまえの笑顔が好きだったのに、それに惚れたのに、思い出せないんだ、最後に見たおまえの笑つた顔が。なあ、ちゃんとした家族つて、なんだろうなあ？

「あんた、後追つて死ぬ気でしょ。そんなこと誰も許さないわよ。あんたのあの世の扉が開くまで、その日が来るまで生き抜くの、どんなに孤独で苦しくても、それが二人へのあんたの懺悔と供養よ」
真湖ママの低く響く声がボディブローのように俺を抉つてくる。仕事も辞めて酒浸りの俺の胸倉を掴んで言つてくれた言葉だ。
「よもつ耶にいらつしやい。まずは、湯屋に入つてその汚い髭面をなんとかしなさいな、待つてるわよ」
辛そうな顔しておまえと息子に手を合わせたまま、それだけを俺に残してくれたんだ。あの人の言う懺悔と供養、しばらく考えたよ。俺はあのまま、あの狭いアパートの部屋で、おまえと一緒に夢見たあの部屋で……眠るように冷たくなつたおまえたちを見つけた部屋で……俺は、ただあの場所で朽ちてゆくのを待つてたんだ。でもな、俺は、おまえが許してくれるまで自分から死ぬことはならねえ、それだけはわかつてたよ、なあ、そうだろう？ おまえがどんな思いで眠り薬を入れた飯を作つたか、どんな思いでそれを食べる我が子を見ていたか……あいつは、イヤイヤしなかつたか？ おまえ、よく言つてたよな、何を作つても、どんなに工夫してもちゃんと食べてくれないつて。おまえのことだ、きつとあいつの好きな物いっぱいの旨い飯を

作つて……なんだよ、それ。やつぱり、俺は何もわかっちゃいねえな。ガス栓ひねつて、愛しい我が子を抱きしめてたおまえに、俺は一生かけてもたどり着くことはできねえ。おまえと息子と一緒に生きていくつもりだつたんだ、一緒によ。勝手だな、勝手だよなあ、おまえが独りで悩んでいゝるなんて思いもしなかつた。いや、違う、俺は知ろうとしなかつたんだ、自分の子供なのに……あいつが可愛くて可愛くて、そう思えば思うほど、どうすればいいか分かんなくなつちまう、どうしようもねえ野郎だよ。なあ、俺はお前の何を見てたんだらうな。おまえの、あのとびっきりの笑顔……おまえは俺以上に不器用なやつだつてこと、今更だな。大丈夫か？ 俺はおまえにそれしか言わなかつた。いつも笑つて、うん、大丈夫だよ。つて……俺がそう言わせてたんだよな、ごめん。おまえが心から望んでいるものを、おまえの叫びを、おまえがどんな思いで毎日俺の弁当を作つて、毎日どんな思いで俺の帰りを待つていたか、何一つ分かつちやいなかった。なあ、おまえがママを連れて来たんだらう？ ただ朽ちていくのを待つてるなんて、許されるわけないよな、そうだろう？

やつと明けてきたな。今日は一日中、雨が降るつてよ。北風が吹いて寒いらしいから桜も終わりだな。俺には相応しい日になりそうだ。さあ、もう少し、俺に付き合つてく

れ、今までこんなこと、なかつただろう？ ここに来てから俺は闇の中で生きて闇の中で眠ることしか考えてなかつたからな、だから、今しかないだろう？ こんなこと話せるのはよ。最初の頃はどうにもピンとこなくてな、ここにいる連中も生きていくように生きていないようで、それについて普通に過ごしてるんだ。そのうち、気づけば昨日までいた奴の姿が忽然と、きれいさっぱり消えてやがる。
「この住人は元々『よもつ湯』のお客なの。あの坂の上の灯りに魅かれて、そこから戻れない、向こうへ行くか、元の場所へ戻るか。闇の中で薄暗い灯りを手放せないでいるわ。どんなに向こうへ行きたくても、時が来なければ扉は開かない、開けてはくれないつてね」

俺が初めてここへ来た時に真湖ママが言つたんだ。だんだんと分かつてきたけどな、『よもつ耶』つて名の意味が。なあ、おまえは知つてたんだらう？ あの坂の上があの世とこの世の境だつてこと、黄泉比良坂……そんなのがあるんだな。真湖ママも夜の世界から足洗つて、こんな所作ちまうんだからなあ。不思議な人だよ、あの人は……店の客も、俺らも、あの人と話していると、どこかほつとしちまう。「四の五の言うな」が口癖で、覚えてるか？ 絡み酒の客には男前の地声で「ここにはあんたに飲ませる酒はないよ、とつととお帰らなさいな」ゾツとするほど静かに言うんだぜ、怖いくらいにな。これも同じだ、あの人がい

るから、みんな、愚かな自分を受け入れていつか来る日を待っていられるんだ、向こう側に行くか、元の場所へ戻るか……それにしても、長かったなあ、俺はいつまであの坂を上って下ればいいんだって庭の桜に悪態ついちゃあ、あいつ、あの大木がワサワサと枝を揺らすんだ。でもよ、あの頃から少しずつ、少しずつ、俺の行く道が見えてきたんだ。俺の望んだあの道が……。

* * *

アメジスト

男がそれに気づいたのは半年前の真夜中のことだった。初雪を降らせた雪雲が去った空に夜更けに昇る青白い月の光がその冷たさを映していた。男はいつも寺町の角で坂の上の灯りを眺めながら客待ちをしていた。さして売り上げを気にすることもなく、深夜にネオン街から逃れてこの辺りをうろつく輩にもそれなりに事情があった。表情も変えず寡黙な運転手の方がこの場所には合っていた。稀に文句をつける客もいたが男にとっては取るに足らない雑音でしかなかった。

その日も一目でわかる訳ありのカップルを近場のラブホテルで降ろして戻ってきた時だった。薄っすらと雪が積もった坂の上に人影を見つけた。運転席から目を凝らすと

まで行つてくださいな」

すっかり色が失せたその薄い唇に、男はヒーターの温度を上げてアクセルを踏んだ。

「やっとな雪が降りましたね、どうりで寒いはずですよ。私は毎年、初雪が降るとお参りにね、主人に会いに行くんです。もう何年経ちましたかね、未だに主人には会えずじまいで、なかなか思う通りにはねえ。ほら、今日は夜になってから降つたでしょ、もういても立ってもいられなくて。そしたら、あの街灯、坂の上のあの灯りがなんとも懐かしくて、あそこに主人がいるような気がして……今でもあんな昔の電柱があるなんてねえ……」

老婆は窓に流れる雪夜の街に顔を向け、もの哀しさを滲ませていた。狭い空間に老婆のささやき声と低いエンジン音が混ざり、コートから微かに香る線香の匂いが漂っていた。十五分ほど走ると北海道神宮の鳥居が見えてきた。

「お客さん、もうすぐ神宮ですよ、どっちへ行けばいいですか？」

しばらくの沈黙に男のくぐもった声が流れた。

「そうね、あそこの二つ目の信号を左に曲がって……そうそう、そこを曲がって真っ直ぐね、真っ直ぐ……ああ、ここで、ここでいいわ、ありがとう」

車を停めた場所は住宅街を抜けた空地の前だった。その奥には黒々とした木々が生い茂り、男が本当にここがいい

冷えた空気に冴えて灯る橙色の下に杖をついた老婆が立っていた。最初は『よもつ耶』の住人かと、しばらくその様子を探っていると老婆が男の車に向かってよろよろと杖を振った。

「なんだよ、ばあさん、客か？ それとも、雪で歩けねえのか？」

男はウインカーを右に上げ、坂の上を目指した。

「運転手さん、神様だね、助かりましたよ、ありがたや、ありがたや」

小柄な体を縮こませて車に乗り込むなり老婆は骨が透けそうなほど萎んだ手を合わせた。浮き出た青い血管が皺の上を走り、左薬指に重たそうにはまった指輪が僅かに差し込む外灯りに照らされて星のように輝いていた。四角くカットされた石の濃紫こむらさきのそれは昔、女房に買った寶石輪を思い出させた。

「お客さん、どこまで？ 行き先は？」

ぶつさらばうな声かけとは裏腹に、どうしてこんな時間に、こんな所に婆さんが独りで立っているんだと女房の思いも重なり、珍しく男の感情が動いていた。ぼつんと灯る明りの下で老婆は藤色のコートに同じ色合いの大きな花飾りが付いた帽子を被り、手袋もせずに立っていた。

「ああ、とりあえず西のね、あつちの方、神宮さんの辺りのか？」と訝しげに尋ねた。老婆は「ちよつと寄り道」と寂しげな瞳を墨色の闇に向け、黒い手提げの巾着から取り出した千円札三枚をシートに置いて車を降りた。

「お客さん！ お釣り！」

皺だらけの札に目を投げて慌ててシートベルトを外した。ドアを開け老婆の方を見た男の瞳に映るものは、光を濃くした更待の月灯りが照らす凍った夜道だけだった。

仕事を終えた帰り道に男はいつものように坂の上に立ち、シートホープに火を点けた。

「あの灯りがなんとも懐かしくてねえ」

うっすらと残る老婆の足跡にしばらく目を落とし、紫煙のくゆる行方に顔を上げた。薄い橙色を灯す裸電球をかすめて、ひんやりとした夜空へ流れて行く先にあの濃紫の指輪が浮かんだ。

「……すっかり、忘れていたな」

男は時を懐かしむように細く長い煙の跡を追った。

宝石といえはダイヤモンドと真珠くらいしか知らない男は、ホワイトデーに賑わう街で鉛細工の宝石を見つけた。透明なケースに飾られたそれは、本物と見間違えにくい綺麗な紫色に輝き、小さなポップには「二月誕生石アメジスト」と書かれていた。眉間に皺を集めてじっと見ている男に若い女の店員が「アメジストは、真実の愛、誠実という

意味があるんですよ」と声をかけた。不器用な男が初めて知ったアメジストという宝石とその意味は、愛しい女そのものだった。

あの婆さん、おまえと同じ二月生まれなのかな。アメジストってやつだよな、あれは。思い出したよ、あの日のことを。おまえ、綺麗だ綺麗だって何度も灯りに翳して、キラキラってなあ……勿体ねえとずつと冷蔵庫にしまったままでよ、あれには参った。結婚を決めた時、小さいけど本物を渡したら二つ並べて「やっぱ、本物だ！」ってあつさり食っちゃまいやがる。おまえ……一番お気に入りなの白いワンピース着て、あの指輪をはめた手であいつの小さな手を握りしめて眠っていたなあ。結局、それがお前の死に装束になっちゃった。だから余計にあの婆さんを送ってから、なんともすつきりしなくてな、次の日に婆さんを降ろした所に行つて確かめたが思った通り、家もなんにも。でもあれは夢じゃねえ、俺はあの婆さんを確かに乗せたんだ。この釣銭が幻じゃねえって言ってるだろう？ でもなあ……なあ、おまえは知つてたんだろ？ あれが偶然じゃねえってことをよ。あれからだ、次の、あの月の夜に必ず誰かが立つてこつちを見ていやがる。さすがに俺だつて気づくつてもんだぜ。今夜は月が隠れてるからいねえだろうと思つても、必ずその頃には雲が割れてあの月が顔を出す

「お客さん、とこまで？」

「……大倉山までお願いします」

無表情に告げる女の目元に目的地への意志が滲んでいた。男はあえて聞き返さずハンドルを切り返して車をネオン街へ向けた。坂を下り始めた途端、雪がふわりふわりと舞ってきた。フロントガラスにペタペタと張り付く雪模様をワイパーが忙しく消してゆく先に、月を隠した雲が雪とネオンの光を反射して薄っすらと明るんでいた。

クリスマスを抑えた深夜の薄野に終電を逃した人波の余韻がイルミネーションに彩られ流れていた。

「真夜中でもみんな楽しそう。今年はホワイトクリスマスになるといいわね、この雪、積もるかしら？」

「さあ……。お客さん、大倉山はどの辺りですか？」

男は女の声に答えず目指している場所だけを尋ねた。

「上まで、競技場まで行つてください」

男の肩が一瞬、後部座席の方へ動きかけルームミラー越しに女の真意を探った。

「こんな時間にと申つたでしょ。でも、大丈夫なの。息子が待つているから。息子はね、ジャンパーなのよ。高校三年だけと将来は日の丸飛行隊の一員、それに向かつて毎日毎日遅くまで独りで練習しているの。頑張り屋さんで困るくらい。だから……」

シンジャッターノカシラ。男の耳に微かに震えた声が届い

んだ……俺の月、更待月さ、ここに来るまでは知らなかったけどな。おまえだつてそうだろう？ せいぜい満月に三日月、半月、これくらいのもんだ。それがこは、どの部屋も月の名だ。新月、三日月、上弦の月、十六夜、立待月、下弦の月、暁月、三十日月、待宵の月、二年も居りゃあ覚えるさ。お陰で俺の時間軸はすっかり旧暦になっちゃった。ここじゃ、俺の名前は更待月だ。慣れてみりゃあ、なんとも妙にしっくりくる。月の満ち欠けなんて考えたこともなかったが、知つてみるとよ、まるで人の一生に思えてくる……夜も更けてから昇り、明け方にはその光も陽に隠れちゃう。まだそこにいるはずなのになあ……さすが真湖ママだ。なあ、そう思うだろう？

* * *

青紫の香り

不思議な婆さんに乗せてから一か月が経つた頃、雪の積もった坂の上に女の姿があった。雲の隙間から白い陶磁器の飯碗のような月が覗いていた。婆さんか？ と、男は反射的に右ウインカーを上げた。坂の途中で黒いオーバーを着た中年の女だと分かり、少しの落胆よりも使命めいた感情が女に向かつて車を走らせていた。女も待ち合わせしたようにタクシーに体を向けて軽く頭を下げた。

た。男は腹を決めて口を開いた。

「いつも、この時間に行くんですか？」

「ええ、昼間は人が結構いるでしょ、この時間だとあの子だけだから……何度か行ったことはあるのよ、もしかして、みんなと一緒に飛んでるかなあって。いつも学校が終わったたらあそこで練習してたから。でもダメなの。私には、みんな、あの子に見えちゃう、スキー板を担いでリフトに乗っているのも、スタート台に腰かけて風待ちしてるのも、アプローチを滑って飛び出して飛んでくのも、音も匂いも何もかもがあの子なのよ。でもそのうち、何も見えなくなつて、すべてが消えて真つ暗になつて……だつたら、最初から真つ暗でいいじゃない。誰もいないここを独り占め。それに今日は私の誕生日なの。毎年、少し早いクリスマスだよつてお花を贈ってくれる、素敵な息子なの。花束じゃなくてシクラメンの鉢植え。中学一年からずつと、それなのに今年……やっぱ、ないのかな、家で待つていたけど、あの子もお花屋さんも来なかったわ。だからね、私から来ちゃつたの、本当は迎えに来て欲しいのに。ねえ、運転手さん、あの子、お花を持って待つているかしら？」

男は黙つたまま車を走らせた。坂の上からここまで、車内は女の声であふれていた。やがて札幌でも高級で洒落た家が建ち並ぶ住宅街の坂にさしかかると、女が少しトーンを上げた。

「あの子、男の子なのに毎年違う品種を選んで、赤やピンク、白……去年はね、とつても珍しい青紫のシクラメン、上品で綺麗な色なの、私も初めて見たわ。セレナーディアアロマブルー。素敵名前でしょ。鼻を近づけるとね、ふんわりとアロマみたいに香るの。リビングにはあの子からの鉢植えが毎年一つずつ増えていって、私はそれを大切に大切に育てて、どの花も私の息子みたいなものね……でも、今年は少し違うみたい、お花がね、花が咲かないの、一つも、ひとつつもよ、ねえ、運転手さん、どうしてかしら？」

「ひとつつも」の響きが悲しみに沈んでいた。男は無言で最後の上りカーブのハンドルをゆっくりと切った。

車をジャンプ競技場の正面に静かに止め、後部座席を振り返ると、瞬きを忘れたように何かをじっと見つめる女が背筋を立てて座っていた。

「おい、くらかしら？ これで間に合いますか？」

女が折り目のない五千円札を差し出し、蛾のような頬が歪んだ。男が釣銭を用意している間、行き先を告げた時と同じ声で淡々と話し始めた。

「あの子、ここから飛ぶのが大好きだったの。札幌の街へ飛んで行くんだ、凄いだぞ！ 最高なんだ！ 瞳を輝かせてね……。でも、札幌の街どころか、空に飛んで行っちゃったわ、私を置いて……あの子と二人きりで、ずっと

一緒にやってきたのに。あの子からの最後のLINE、お母さん、ありがとう。ごめんね、お母さん。それだけ。ねえ、運転手さん、それってどういう意味かしらね」

男は何も言わずにレシートと釣銭を灰色のトレイに載せた。女はそれを一瞥してそのままに「乗せてくれてありがとう」とだけ言った。男は車から降りて後部座席のドアを開けた。雪闇の奥で天上へ突き抜ける大きな巨人と化したジャンプ台が待っていた。車から降りた女は、闇の前で立ち止まり右肩を少し開いて男に顔を向けた。

「誰も教えてくれないの、誰も……。気づいてあげられなかった、私はあの子の何を見ていたのかしら……」

歩み始めた黒いオーバーの背が闇に同化していく。男は車にもたれたまま、全てが溶け込む様をじっと見ていた。地上と天上が一面の雪闇に閉ざされ、天幕が下りたような世界に白い息を吐いた。車に戻ると、釣銭の載ったトレイだけが妙に生々しかった。窓を全開にしてショートホープを啜え、翳す男の手の中でライターの炎が小刻みに揺れていた。

*
*
チタンブルー

新年も明け、若者が大人になるイベントも終わった頃、

窓を開け、煙草を啜えた時、後部座席の窓がコツコツと鳴った。振り向くと、白髪交じりの髭男が窓を覗いていた。

「三十日月さん!？」

啜えたばかりの煙草を灰皿に置いて自動ドアのレバーを引いた。

「やあ、助かった。まさか、ここでアンタに会えるとはな、悪いが『よもつ耶』まで乗せてってくれ。ここまで歩いてきたが、さすがにこの坂はしんどいと思ってたところ、神様仏様、更待月様だ」

「金はあるのか？ 遊びじゃねえんだ、ワンメーターだろうが、金はもううぜ」

男はこの三十日月の素性をよく知っていた。薄野時代の客だったこの男も今では『よもつ耶』の住人だった。

「冷たいこと言うなよ、昔からの誼みじゃねえか、それに、俺がスッカランだったってこと、アンタだって知ってるだろうさ、だったら、これでどうだ？ プンタだけだな」

三十日月は背広の内ポケットから口を開けたばかりの煙草の箱を取り出して仕切り板の下から運転席に手を伸ばした。男はその手を払いのけて舌打ちを呑みこみ、シートベルトを締めた。

「……ありがとな」

ぼそりと言って、少し潰れた煙草の箱を料金皿の上に置いた。運転席と後部座席の結び目のようにタイヤの動きに

今夜もあの月の日だと、男は部屋を出る時に釣銭の入った二つの茶封筒をズボンの尻ポケットに押し込んだ。チャリ、チャリと小銭の音が二つの夜を物語っていた。外へ出ると朝から降り止まなかった雪は街を一面の白に染めあげ、空には雲一つない薄闇が広がっていた。男は少しくたびれた黒の長靴を履いて『よもつ耶』から真っ白に埋もれた坂を歩いた。足跡ひとつない新雪の坂道で片足が脛まで埋まるたびにチャリン、チャリンと音が鳴り、妙なBGMが雪降りの後の静けさに流れていた。坂の上の電柱にたどり着くと、さすがに小さな山を一つ越えたような疲れがどつとあふれて両肩と背中が大きく上下した。

「おい、今夜はどんな奴を乗せるんだ？」

こんもりと雪をのせた丸傘の下で灯る裸電球に声をかけた。ネオンの街も深い雪に覆われて道路や歩道の脇には除雪された雪山の壁が車を停める場所を奪っていた。男はいつもの場所から少し離れた寺の裏門前に車を停めた。車の鼻先を坂の上に向けて真っ直ぐに眺める景色は静止画のようにフロントガラスの画角に収められていた。冷え切った空を照らす更待月へと伸びる木柱のシルエツトがいつもよりも大きく見えた。坂の上の灯りの下に立つ人影は深夜一時を過ぎても一向に現れなかった。

「おい、今夜は誰も来ないのか？」

合わせて『セブンスター』の銀色の小さな星屑が揺れた。ものの三分もしないうちに車は『よもつ耶』の前に着いた。男は後ろのドアを開け、ルームミラー越しに三十日月に声をかけた。

「これ、いらねえよ、ブンタ、吸わねえから。メーターも入れてないしな」

「……」

「おい、早く降りろよ、降りねえのか？ ったくよ」

一向に動かない髭顔を振り向いてドアレバーを下げた。

キンキンに冷えた外気を呼び込んで勢いよくドアが閉まった。

「おい、あんた、どうしたいんだ？ どうするか、さっさと決めてくれよ、どっか行きたいとこでもあんのか？」

男はフロントガラスの向こうの月に向かって、なかば諦めがちに言った。

「悪いな、なんとなくよ、アンタとこうしているのも、巡り合わせのような気がしてな、なんか考えちゃまった。金はねえが、これでどうだい？」

三十日月はさつきと同じ内ポケットから何かを取り出して、セブンスターの箱の上にそっと置いた。

「いい色だろ、高いもんじゃねえが、娘が初めての給料で買ってくれたもんだ。もう二十年も前の話だが、これだけはずっと使わねえでしまっておいた。チタンブルーという

らしいが、俺の顔が映るくらいピッカピカだ。あらかた、なんにもなくなっちゃった俺の唯一の家族の……なんだ、未練たらたらだ、笑わせるよな、アンタにやるよ、それ、そのZIPPPO、質に入れたところで大した金にはならんしな」

「そんな大事な物、車代の代わりにするな、さっさとしまってくれ。ところで、どこに行きたい？ 行きたいとこ、あるんだらう？」

「……」

「おい！」

男は鋭い目で後ろを振り返った。

車は中心部を抜けて北へ少し走り、北大通りを裏手に回ったところで速度を落とした。

「ここで停めてくれ」

低く緊張した声に車を停めてライトを消しエンジンを切った。灯りの消えた家が建ち並び、どれもそれなりの家構えをしていた。降り積もった雪に凍みこんだ真冬の夜が辺りをしんとさせた。

「薄野から十分ちよいだが、今の俺には果てしなく遠い場所だ。金、金、金……人も金も俺の自由自在、面白いように集まってきた。一度、知っちゃまうと抜け出せねえ、アンタも知ってるだらう？ あの頃の俺をさ。一晩で百万なん

雪を踏みしめるたびにキュッキュッと鳴った。足を取られながら背を丸めて坂を上り、ジャンパーのポケットに手を入れた。ショートホープの固い箱とは別にカサカサと指に触る薄紙の箱を握りしめ、もう片方のポケットの中でずつしりと重いライターを握った。

三十日月は薄野の手前で車を降りた。金も煙草もライターも要らないという男に一旦は引つ込めたセブンスターとZIPPPOをドアが閉まる間に座席に放り込んだ。フロントガラスの向こうで重い足取りの後ろ姿がビル街へ紛れていった。きつとこの冷たく凍った雪色の街をさまよっているのだからと男は薄紙の箱から一本抜いてチタンブルーの蓋を上げた。オイルの匂いに包まれた炎が立ち上り煙草の先がチリチリと赤く鳴いた。いつもとは違う香りに深く煙を吸い込み、手のひらのZIPPPOに瞳を落とすと、ネームが彫られていた。昔はあの場所にそれと同じ名前の表札があったのだから。鏡のように磨かれた深い青が光り、手のひらの中で橙色の小さな火花が咲いていた。

坂を下りた男は、三十日月の部屋の前にハンカチで包んだずつしりとしたライターを置いた。

て当たり前で金の有難味なんてクソくらえってもんでよ、金まみれってのは厄介なもんだ。人騙して、仲間騙して、その成れの果てがこれだ……この家だけは頭のいいカミさんのお陰でなんとかかな、とつとと俺に見切りをつけて弁護士とちやっかり土地も家も名義を自分にしてやがった。それが終わったところで離婚届けに判だ。俺に突き付けた時のあいつの顔、つるつとした能面に張り付いた眼が、あんたはゴミよ、自業自得でしょって……因果応報、身から出た錆、まあ色々あるがどれも俺にびつたりだ。なあ、どうせなら三十日月と呼ばれるより、そう呼んでもらった方がしっくりくるんだがな。今となつちや、俺にできることは、この身一つで大金を残すことくらいだ……俺のために泣いてくれる奴はもういねえしな」

男には、いったいどの家が三十日月の家なのか、はつきりしなかった。それほどに三十日月は狭い空間から白い街灯に照らされた世界をぼんやりと眺めていた。

「降りなくていいのか？」

「……」

「どうしたいんだよ、あんたは」

「ああ、そうだな……もう十分だ、行ってくれ」

男は束の間、じっとしたままの後ろの気配に浅いため息をついて車のライトを点けた。

* * *

青いタオル

「おじさん、今日は何の日か知ってる？」

坂の上で乗せた若い女が気分の抜けた顔をルームミラーに映し、男を覗きこんでいた。行き先を告げたか細い声はどこかへ消え、長い髪を掻き上げて酔いませの絡む声に男は見向きもせず豊平川沿いの道を藻岩山の麓の教会へ車を走らせていた。

「不愛想な運転手、全然違うじゃない、あのおばあちゃんに言われたから、あそこで待つてたのに」

「あのおばあちゃん？」

男はミラーの中の顔に目を移した。

「うん、寺の前でウロウロしている私に、声、かけてくれたの。あの坂の上で待つてなさいって、優しい運転手さんが来てくれるからって、だから私……」

男の脳裏にあの場所で初めて乗せた婆さんの顔が浮かんだ。

「どんな人でした？」

「なんだ、それには答えるんだ。杖をついた上品そうなおばあさん。こんな時間にホラーだけど私、少しも怖くなかったの。それよりも、なんかホツとしちゃったから」

なぜ、あの婆さんが。男は直ぐにでもあの場所に戻りたい気持ちを抑えて、この女の理由を考^わえていた。

「バレンタイン、今日はバレンタインデーよ、そして、私と彼の結婚式……おじさん、おめでとございますすくらい

「だから、誰も迎えに来てくれないの？ ねえ、そうなの？」

川沿いを下りて最後の交差点にさしかかった時、けたたましいサイレンと赤色灯が黒いワゴン車を追いかけていった。

教会の前に車を寄せてライトを一段落とし、男はドアを開けずに女の言葉を待つていた。女は少しだけ窓を下し、雪に煙る闇の奥をしばらく見つめて自分でドアを開けた。さっきのサイレンが微かに白い夜に響いていた。男はドアをそのままにしてシートベルトを外し、煙草を啜えた。目の前を流れる寒そうな雪に最後の煙を細く吐き出して後ろのドアの向こうに顔を向けると、雪まみれになった女が教会の横から引き寄せられるように近づいてきた。

「……やっぱ、ダメみたい」

ドアの傍に立つ女の涙の跡に薄らと雪が積もっていた。男はダツシユボードから青いたオルを取り出して車を降りた。

「駅まで……札幌駅まで送ってくれますか？」

「三年前の今日、あの教会で結婚式を挙げることになっていました。ウェディングケーキはハート形のチョコレート。私の手作りです。彼と二人で、いっぱい、いっぱい、準備したのに。でも叶わなかった。彼は私の目の前で死ん

言つてよね」

ルームミラー越しに軽く会釈を返して、細かい雪がちらつき始めた深い夜にアクセルを緩めた。豊平川沿いを南へ走る車を雪舞う川風が追いかけていた。

「私ね、この川に何度か飛び込もうとしたけど、いつも間が悪いの、誰か彼かに声をかけられる。おばさんやおじさん、女子高生、親子連れ……そうとうヤバイ女に見えたんだらうけど。だから、この川、私、大嫌い。それなのに、おじさん、ここ通るんだもの、思い出しちゃうじゃない」

「……」

「ねえ、なんとか言つてよ」

「どんなに向こうへ行きたくても、時が来なければ扉は開かない、開けてはくれない。お客さんの扉もね」

「何、それ？ 扉って……」

小声で口ごもりながら窓を打つ粉雪に顔を寄せた。

「その扉は自分じゃ開けられないってこと？ それなら誰が開けてくれるの？ それとも、ただ開くのをしつと待つだけのの？ 教えてよ、おじさん……ねえ、この雪に埋もれたら扉は開くのかな」

虚ろな瞳を真っ白な雪が覆っていた。

「向こうへ行くか、元の場所へ戻るか、どっちにしても、あんた次第だ。ただな、まだこの世に、あんたを待つていてくれる人がいるんじゃないのか？」

でしまいました。何度も何度も彼の名前を呼びました。叫んでも叫んでも彼は……二人で横断歩道を渡っていただけなのに。彼は突つ込んできた車から私を守ってくれました。どうせなら私も一緒に死ねばよかった、死にたかったです。彼のもとに行きたいのに、薬を飲んでも手首を切っても、何をしてもダメなんです。友達は言います、守られているんだよって。誰にですかね……お父さんとお母さんは私が中学二年の時に酔つ払い運転の車に殺されました。その時も、後ろに乗つていただけが助かりました。おばあちゃん、私にありがとうつて、おまえだけでも生きていてくれて良かった、お父さんとお母さんが守ってくれた

繭の中

森崎房枝



まほろば賞特別賞・銀華文学賞優秀賞受賞作品
森崎房枝名作集 1540円（送料共）

んだと言います。私は車が嫌いです、大嫌いです。でも今、こうして乗っている……バカみたい。悲しくて絶望しかないのに今日も彼は迎えに来てくれませんでした、お父さんもお母さんも迎えには来てくれませんでした。私はいつになつたら、彼の傍に行けるんでしょう。ねえ、運転手さん、教えてくれませんか？」

膝の上の青いタオルにぼろぼろとこぼれた涙の跡が濃い青に滲んでいた。

車は人気の消えた駅のロータリーにゆっくりと入っていった。

* * *

再会

今夜は会える。そんな予感が男にはあった。一か月前の若い女を連れて来たのがあの老婆なら男はもう一度、会いたいと願っていた。

「こんばんは、今日も神宮までいいですか？」

「あら、私のこと憶えてくれたのね、ええ、同じ場所までお願いしますね」

藤色のコートと帽子、あの時と変わらない姿でやんわりと笑っていた。老婆は男が客を降ろして戻ってくると、それを待っていたかのように雪が消えたあの坂の上に立って

ルームミラーに映る老婆はどこに向けるのでもなく、あの皺だらけの手を胸の前で合わせて穏やかな瞳で走り行く真夜中を見つめていた。

「俺には難しいことはわかりませんが、俺も待っているんですよ、あいつが……女房と息子が迎えに来てくれる日を。しんどいですが、勝手は許されません。俺はその日までこうしてここで生きているしか、それが俺の罪と罰ですから」

「罪と罰ねえ。この世で誰もが少なからずそれを抱えて生きていますよ。許しを請いながらね。迷いながらさまよいながら……望みはたった一つ……なのに」

手を合わせたまま話す声が所々小さくなった。車は迷うことなくあの場所へと向かっていた。

「遠い昔、最後の恋をしましてね。その人と一緒にいるために、たくさんの人を傷つけて、裏切って……。感謝して大切に守って生きていかなければならないのに私はそれを捨てました。二人でいることだけしか……浅はかなものですよ。どうにも許されないうなら、神宮さんにお参りしてあの森へ、二人ですっと一緒にいましょうね、そう約束したんですよ、それなのに……私だけがこの世に残されてしまいました。あの人のご家族にとつては、私は人殺しでしかありません。それでも信じていましたからね、いつかきつと、必ず迎えに来てくれると」

いた。

「あの時は、ありがとう。助けてもらいました。あのままだと、どうなっていたことやらねえ。道路の雪もすっかりなくなつて季節が一つ、また終わりましたね」

しっかりと口調で声にハリがあった。初めて会った時のもの哀しい面影が消えていた。

「ああ、そういうえば、あの若い娘さんは大丈夫でしたかね、あの人もここへ来るべくして来たのだと思いましてねえ」

これも縁なのだと聞こえ、男は札幌駅まで送ったことを告げた。

「朝一番の列車に乗ると言っていましたから。釧路の方に老婆さんがいるらしいです」

「そう、行くべき道を見つけましたか……戻れる場所があるなら、待つてくれる人のためにも。お互い独りぼつちは辛いですからね。ところで、あなたの、あなたの行く道は見えてきましたか？」

「俺の？ 俺の道ですか？」

どう答えればいいのか、男は戸惑う己に口を噤んだ。

「私にもね、ようやく、ようやく……独りで時が来るのを待つのも、なかなかしんどいものでね。でもそこを通らずに私の道は見えなかつたのでしょうか。今思えば、なかなか遠い道でしたよ、こんなおばあちゃんになつてしまいました」

左指に輝く濃紫の石に唇を寄せ、祈るように臉を伏せたその姿に、男は緩やかに車の速度を落としていった。フロントガラスの前にあの墨色の闇がぼつかりと口を開けて待つていた。

「ありがとう、着きましたね。お代はこれで」

あの時と同じクシヤクシヤな千円札三枚を料金皿に置いた。

「いや、今日は。この間のお釣りもお返ししていませんから、それで結構です」

「それじゃ、運転手さんが困るでしょ、あなたのお仕事ですからね」

「実は、メーターのボタンを押し忘れていました。俺は、ずっとあなたに会いたかつたから。会えたことで……だから大丈夫です」

「そう。メーターをねえ。それにしても、どうして私に？」

男はライトを消してエンジンを止めた。

「理由を知りたかつた、なぜ、あなたがあの場所に立っていたのか、なぜ、俺だつたのか」

シートベルトを外し、老婆を振り返つてしばらく目を合わせた。真正面から誰かの瞳を見つめたのは記憶にないほど久しぶりだった。男は唇を固く結んで自動ドアのレバー

をゆっくりと引いた。

「ありがとうございます。お気をつけて」

振り向いた男に哀愁に満ちた笑みをすつと浮かべて老婆は車を降りて行った。

今夜もあの月が浮かんでいた。老婆が向かう先を照らすように漆黒の森の上に輝き、寄り添う二つの影を映していた。

* * *

卯月の雨

昨日から降り続く雨が街をしつとりと濡らしていた。いつの間にか白い粒となって時々強く吹く風がパラパラと窓を打ちつけ、季節外れの霰が夜空から小さな弾丸のように落ちてきていた。今夜は誰もいないだろう。男は厚い雲に隠れた月を見上げ深く息を吐いた。それでも、何かがそこにあるようで車を坂の上へ走らせた。

灯りの下で車を止め、ゆっくりと動くワイパーの間から闇に沈んでいる『よもつ耶』を眺めていた。天の怒りが静まったのか、霰が雨に変わり目の前に広がる雨染みが視界を歪ませた。瞳に映る全てが果てしなく流れ落ちる隙間を黒い人影がゆっくりと傘もささずを上ってきていた。男はライトを点けようとした刹那、息を止め、近づいてくるそ

のたびに車を停めてドアを開けたが、後ろの男は一向に降りようとはせず、ルームミラーに黒光りする二つの玉を映すだけだった。

「俺は、俺の、本当に行きたい場所はどこだ！ 行くべき場所って、どこなんだ？」

「……」

「おい！ いい加減にしろ！」

「だから言っただろうが、てめえが一番、知ってるだろうってな。それとも意気地なしのおまえには無理か？ だったら、まだまだ遠いな、『いい加減にしろ！』は、お前だぜ」

男の全身に自分の声突き刺さり、その様をもう一人の自分が胸底を抉るように冷たく見つめていた。

一番近くて一番遠い所、一番愛おしくて一番……ここが最後だと、白壁の古いアパートの前で男は後ろのドアを開けた。さっきまでの雨と雲が跡形もなく消えていた。

* * *

三十日月、あいつもどうとう行っちゃまったよ、レンタカー借りて中山峠で事故りやがった、言葉通りにちゃんと……ここじゃ、悪態ばかりつく野郎だったが、あのZIPPO、あれだけは大事に持っていたんじゃねえかな。なあ、なんだったんだろうな、あの婆さんを乗せてから今日まで。俺が嫌ってきた縁をおまえが繋いだのか？ 人を

れをじつと、ただ、それがここへたどり着くのを見届けていた。

「あれは……俺か？」

姿の見えぬ月に向かつてぼつりと言った。男は自動ドアを開け、ずぶ濡れの自分が乗り込んでくるのを待った。

「悪いが、タオルを貸してくれ」

これは俺の声か？ 後ろから両の耳に届くその声に頭を振りながらダッシュボードを開けた。

「寒くないか？」

青いタオルで濡れた体を拭いている自分になんとか振り絞って声をかけた。今、目の当たりにしているこの現実も自分が通らねばならぬ道なのだと思いが徐々に消えていった。

「どこへ行くんだ？」

俺はどこへ行くというのだろうかと思は自分の声を待った。

「そんなことぐらい、おまえが一番、分かっているだろうよ」

真つ黒なガラス玉の瞳が二つ、男を睨んでいた。

心の思いつくまま、雨の街を走った。二人が出会った真湖ママの店、二人で行った初めての場所、映画館、公園、レストラン、あいつが好きだった場所、好きだった街、そ

避けてきた俺の罪か……結局、俺はここでも逃げてたんだな、あの夜に思い知らされた、やっぱり駄目な野郎だぜ、俺は。おまえがいねえと、からっきしだな。なあ、この雨、夜までになんとか止むといいな。どうせなら、俺の月に見送りたいぜ、あの婆さんみたいな、おまえもそう思うだろう？

* * *

蒼の空

雨上がりの空が蒼く染まる頃、男は初めて『よもつ耶』から上ってきた坂の上で煙草を吸った。いつもよりも時間をかけてゆつたりと煙を含み、ネオンの灯り始めた街に目を細めて静かに煙を吐き出した。見慣れた橙色に紛れて空へ流れてゆくのが妙に心地よかった。

「これから仕事ね、行ってらっしゃい……あら、あんた、それって」

出掛けの後ろ背に経を読み終え部屋から出てきた真湖ママに声を掛けられた。男は手にしていた黒いボストンバックを足元に置き、振り向いて深々と頭を下げた。

「……そう。行ってらっしゃい、そういえば今夜はあんたの月ね」

それ以上は何も言わずに送り出してくれた。

男は最後の煙を体に残っていた息とともに吐き出すと、いつものように黒茶の木肌に燃える先をねじ込んで焦げ跡に指を這わせた。ざらつく肌の感触を残して小指の先ほどの潰れた茶色のフィルターをショートホープの箱に戻し、古びた電柱の足元に置いた。男はそのまま、振り向かず、ネオンサインの海へ続く坂を下りて行った。

男の長い一日が終わろうとしていた。今日一日、逸る気持ちをお願いにかけて札幌の街を走った。日付が変わる頃に姿を見せた月を連れて最後の客を北の外れまで送った。時間をかけて坂の下へ戻ってきた時には深い蒼の空を月灯りが白く染めていた。そのせいも、いつもよりも透明な橙色が坂の上を照らし、男の確かな思いに光をそそいでいた。男はハンドルから手を放し、暗闇に瞳を閉じてその時が来るのをただじっと待っていた。次第に研ぎ澄まされてゆく感覚が、夜を流れる一ミリほどの時の揺れも逃さなかった。やがて、男は月の合図を得たようにライトを点けて右ウインカーを上げた。

スポットライトのような灯りの下で寄り添う二つの影は、車が近づくにつれその輪郭を濃くし、ひとりの女とそその手を繋いだ幼子が立っていた。目の前で停まった車に女の顔を見上げ、にっこりと笑うその仕草が愛らしさに満ちていた。男は肩を震わせ、くしゃくしゃな顔で車のドアを

開けた。

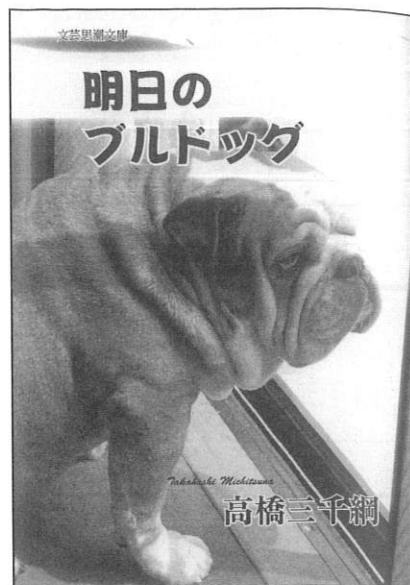
二人が乗り込んでくる様に耳を澄ませ、伝わってくる大きさの違う振動に高ぶる震えを堪えて行き先を尋ねた。「どこまで行きますか？」

「あなたの……あなたが一番行きたい場所へ連れて行ってください」

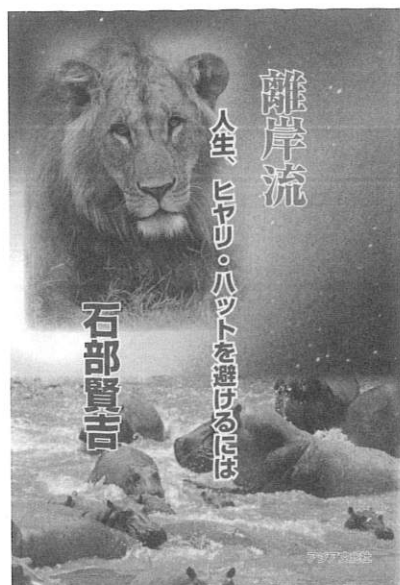
待ち望んでいた声があるところがあった。二人に向けて頷く瞳にもう涙は消えていた。背を伸ばし思いのたけをこめて、男は静かにドアを閉めた。



海邦智子 みくに ともこ
 1962 函館生まれ
 83 北海道武蔵女子短期大学卒業
 83 以後(株)札幌ツーリスト、近畿日本ツーリスト(株)、(株)HKワークス、(株)秋吉などに勤務
 2004 札幌文学会同人
 05 北海道鉄道文学会同人
 現在専門学校在学
 「愛しき人」で第9回鉄道文学大賞優秀賞受賞



高橋三千綱の傑作愛犬小説



元商社マンの地球規模の貴重な体験記 1300円
 Amazon にても Kindle 版発売中



第7回健友館文学賞大賞受賞!
「彼らは何を語りたかったのか」
タイ・カンボジア難民の難民村。炸裂した砲撃で難民村になった数多くの死体が散らばっていた。

カンボジア難民の悲劇を描く
 本体価格 1,700円
 御注文はアジア文化社まで



タイのすべてがここに
 特価 2000円 (税込/送料共)
 注文はアジア文化社まで

札幌文学

北海道

北海道の同人雑誌の灯りを守る

全国どこでも同じだとは思いますが、戦後の一九四五年から五年の間に創刊された北海道の同人雑誌は、ざっと数えて五十二誌。その中に私どもの「札幌文学」も加わって一九五〇年一月の創刊。すでに創刊七十一年、現在九十二号発行の準備中という誌歴を持つ道内一の老舗となった。

創刊時の札幌文学の同人は十三名で、編集発行人は西田喜代司。特に文学的な主義・主張も持たず、何の拘束もなく発表させるという編集方針だったと聞く。だが、創刊号が出たとき「中央文壇と繋がりが持ったなかで次々と同人を押し上げるべき」とする意見が出てきた。これに対して「文学的に荒蕪の地である北海道に肥料を施す役目を果たせばよい」とする西田編集人とは意見が合わず、札幌文学創刊に大きな役割を果たした数人が脱退した。

このため一時的だが、継統が危ぶまれた札幌文学だった。これ以後、号を重ねるにつれ、道内各地の実力者や有力新人が加わって札幌文学の実績を向上させた。ところが一九五二年、九号を発行する直前、西田編集人が病に倒れ



札幌文学会例会（懇親会）札幌すみれホテルにて

再び一時休刊となった。この時点で同人は四十名だったが、急ぎよ、澤田誠一が西田に代わって編集発行人となる。再刊十号の後記にその澤田誠一が次のように書いている。

「北海道で文学する者には避けられない、存命的に意識されている者でありたい」

札幌文学は澤田誠一の後記によって大きな飛躍を遂げたようだ。札幌文学を足場に中央文壇への飛躍を果たした者を含め、梅田昌志郎、橋崎政、真崎晋吾、中沢茂、山田昭夫、工藤欣弥、比良信治、佐々木逸郎、上西晴治、小椋山博など、さまざまな人物が足跡を残し、北海道文学の担い手として不動の立場を確立した。当然、いずれも北海道を

舞台にした骨太の作品である。

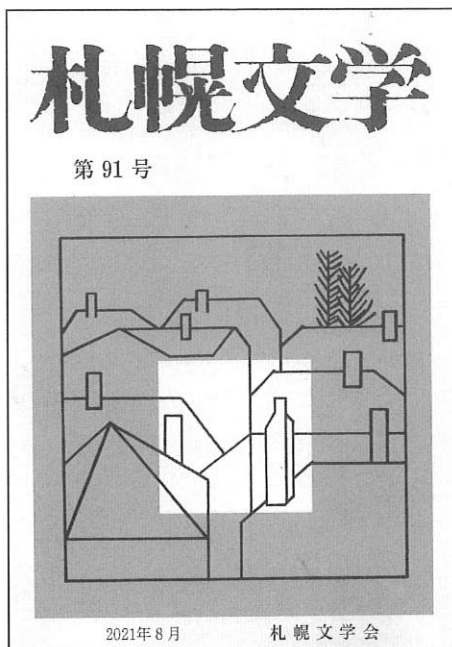
編集人は澤田誠一から梅田昌志郎、山田昭夫、小野規矩夫、工藤欣也、小松茂、田中和夫へと引き継がれ、現在は坂本順子が担当している。札幌文学の年二回発行は第三十九号まで続いた。昭和四十年代である。釧路の「北海道文学」連載の原田康子さんの「挽歌」が女流文学者賞を受賞し、さらに映画化されたのは昭和三十年代だが、これが機となったのか同人雑誌ブームが全国的に興った。この時代の道内の同人雑誌数は、地方自治体による市民文芸誌も含めて百三十を超えていたらしい。

だが、時代は急速にデジタル化しつつ進む。

いつの頃からか、活字離れが進み、新聞購読者の激減、文芸出版物の不振、書店の激減……。そして同人の高齢化による同人雑誌の廃刊、印刷費用の負担増による休刊・廃刊。

つい最近、「人間像」と「文芸見聞」が終刊になった。歴史があり、優れた作品が載った両誌だった。閉じた理由は同人の高齢化だと聞く。「人間像」は後継者なし、による廃刊だという。

札幌文学は三十名を超える同人が加わっていた時もあったが、いまは往時の半数近くの同人で年一回の発行を継続している。実は十五年ほど前、「実力ある同人の発表の場」という編集方針を「文学を志す新人に広く門戸を開く作品





北海道同人雑誌懇話会／加入同人雑誌の代表会議 札幌すみれホテルにて



札幌文学会例会（合評会） 札幌すみれホテルにて

発表の場」に改めた。そして同人費は年間二千元。宣伝をしたわけではないのだが、これまで男性中心だった札幌文学はにわかには女性同人が加わって、彩り豊かな文芸同人誌に変貌した。これも同人雑誌の裾野を広げ、新しい方向に進む発展の一つの道だと納得している。

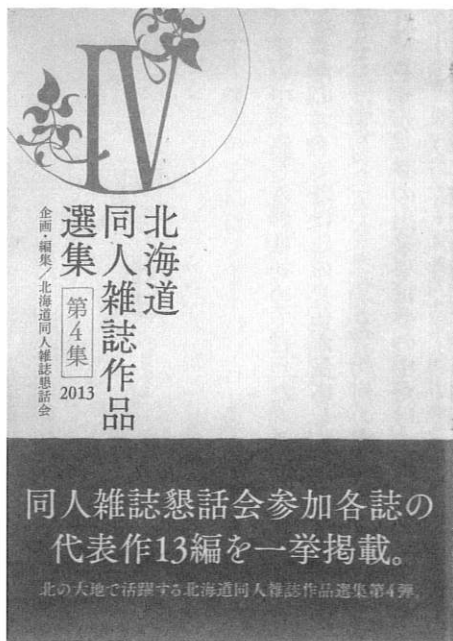
これもまた古い話だが十年前の春、「江別文学」と「鉄道林」の編集者に声をかけ、「札幌地方同人雑誌懇話会」を立ち上げた。やがては北海道内の同人誌間の交流を図り、それをバネに互いの活性化を図りながら同人誌の継続発行を願う企画だった。参加は当初、札幌圏内の十八誌で、連絡会を重ねることに参加が増え、翌年には「札幌地方同人雑誌作品選集（第一集）」を刊行するまでに発展した。掲載作品は各誌を代表するもので、各誌に委任だった。紀伊國屋書店札幌駅前本店ギャラリーでの「同人雑誌フェスティバル」も決まった。同店二階ギャラリーで開催の「パネル展」も大入りだった。その翌年、「札幌地方」を「北海道」に改め「第二集」を刊行した。

「北海道地方同人雑誌作品選集」は、当初の予定通り第五集で終了した。

五年にわたる選集刊行とパネル展開催で知ったのは、小説や随筆を書きたいと思っている人が非常に多いことだった。その思いは様々だが、そのシーンに出会うごとに同人雑誌に関わる周りの仲間たちを見回してしまう。

そして「北海道の同人雑誌の灯かりを守る」と自分に言い聞かせながら、私どもの強靱な信念は、今も、これからも決して崩れることはない、と再び言い聞かせてしまふ。

（文責／田中和夫）



「札幌文学会」 代表・田中和夫 編集発行・坂本順子
〒001-0034
北海道札幌市北区北34条西11丁目4・11
坂本方 TEL011・746・5802